

靈象

泉鏡花作

—

「唯今何時でございませう、
と時間を聞きながら、幅廣な博多の角帯の間から、
被せか、鍍金が、正のものか、金色の燦爛たる懷中
時計を、對手に見えるやうに、鎖長く引出したのは、
年紀三十二三の盲人で。」

目鼻立は尋常であるが、縮れツ毛の生際から細く
尖つた頤まで、揉上、耳朶をかけて、ペろりと一皮
剥いた肌へ、白粉を叩き込んだやうな不氣味に生白
い、而して眉の薄い、曇つた顔色。

黒の繭紬の羽織に、紺の萬筋銘仙の袷、其の博多
の帯と、是はあるべかり仔細はないが、汗取の肌
襦袢、木綿の白襟を幅廣く、きちんと咽喉もとで搔
合はせたのと、淺黄の唐縮緬の襦袢の袖のちら／＼
は、聊か氣になる。

これに黒の山高帽子、脱がず、被つたまゝで、トある荒物屋の店の、これから商物を並べようと云ふ、土間の縁臺の端の處へ、ちやんと畏つて、少し前屈みになつて、今其の時計を引出した。

對向ひに腰かけたのは四十年配、棒縞の廣袖に浴衣を襲ねて、三尺帶、旅籠屋か何ぞの寢衣のまゝで出たものらしい、赤ら顔で小肥りに肥つた漢。

馴れた風に、時計の表を一寸覗いて、

「五時半 些とまはりましたな。」

「はあ、五時半、」

と言ひながら胸を伸すと、引張ツこで、鎖を膝なりに向うへ突張つたが、節の高い、細長い、器用さうな指で、硝子蓋をコツとはづして、軽く細かに二つばかり、時の針に觸つて見た、成程器用なものである。

仰向いてニヤリと笑ひ、

「七分ばかりまはつたですね。」

と又ニヤリ。パチンと鳴らして、ざく／＼と鎖を
捌いて、最う一息反つて、下から帯をぐいと上げて、
上からすつと挟んで、下の手でトンと叩くと、其の
手で件の白襟をずいと扱いて、直ぐに両手で袖口を
引張つたまゝ、膝頭へ重手に組んで、据ゑ帽子の猫
背になり、顛だけ突出して、

「へゝゝゝ、」

と笑つて、

「憚り、」

とばかり鷹揚に些と高慢。

何んだ、自分で分るくらゐなら聞くには及ぶまい、
見せつけがましい、小面の憎い、それにしても感の
いゝ、とじろ／＼、眼を据ゑて見上げ見下し、

「お前さん、器用なもんだね。」

と構はず、然りとしては山高を見下げたものいひ。

「不自由はないが見えないばかりさ。」

とまんじりとした顔で、

「お前さん、遠方かい。」

賣つた（お前さん）を、買った（お前さん）
負けずに遣る。此處等の土地では、此の（お前
さん）は失禮に當るから。

「直き其處だア。」

「近所かね、」

「目と鼻の先だよ。」

「鄰家かね、」

「鼻の先だといふに、」

「分らない。」

と顔を傾ける。

「分るまい、矢張り盲目だ。それ、すぐお前さん
の側に腰を掛けて居るぢやないか。」

盲人は眉を擡めた。額のあたりに險が見えたが、

聞かぬ振をして、

「眞面目に 何處から來なすつたんだ。」

「つい居まはりの旅籠屋から、起拔けに來たんだ

かね、實は旅商人さ。」

「はあ、商人か、」

と軽^{かる}んずる色^{いろ}を泛^{うか}べた。
「何^どうです、儲^{まう}かりますかな。」

「串戯を言つちや不可え。」

と對手は何故か突懸り氣味になつて、

「人ごみを見掛けて餡パンを賣つたり、蜜柑、煙草を商ふんぢやないぜ。お菓子はよしかにしてやあら。恁う見えても、否さ、お前さんには見えやしまいが、しらきちやうめんの見物だぜ。

おい、

「見物？ 何を見物するんです。」

「何をツて、あれよ。向うの監獄の門が開くと、亭主殺しの別嬪が、御年貢が濟んで、久しぶりで今朝娑婆の風に當るのが、追付け出て来る。それを觀るのよ。」

「變な見世物だね、牢を出る罪人を見物も可笑なものだ。」

と乾燥いだ下唇を眞赤な舌で一寸濕して、ごつくり唾をのみながら鼻の尖でせゝら笑ふ。

商人は目をぎろり。

「異う言ひなさるもんだ。えゝ、おい、お前さんだつて見物だらう。おまけに煙草盆なんぞ借込んでよ。随分人群集はして居るが、そんな念入なのは一人も居ねえぜ。馬鹿にしねえ。」

忌々しさうに、手を廣袖へ突込んで、二の腕のあたりをごし／＼と搔きながら、横向きになつて取合はない風をする。

盲人は指を反らして、膝頭を一つ弾き、

「邪慳だね、君は、はゝゝはゝゝ、」

と吐出すやうな笑ひ方をして、

「私の言ふ事が何んだか一々氣になるやうだね。」

「當前よ、」

と流眇に懸けたが、又此の商人といふ漢の目の、きよろ／＼と働くのは、對手が盲目だけに尚著しい。

「小癩に障るかね。」

「ちよツ煩え。」

と舌打をする。

「まるで喧嘩だね。仇同士のやうだ、はゝは、」

件の其の笑方をして、ぐツと仰向き、身體ごと手を腰へ廻して、羽織の裏を引覆すやうにして、煙草入を抜きながら、ト笏を構へた體に、兩手で筒を膝に突立て、最う一息斜ツかひに仰向いて、

「時に、君、仇 同士と極まつた處で、一つお願いがあるが聞いてくれませんか。君も私が小癩に障る。

私もまた、先刻からの様子で、君を優しい人とも、しんせつな人とも思はない。宜しいか、」

と念を入れ、唇をぺろりと嘗め、
「意地の悪い、邪険な、鋭い、油断ならない人間だと思ふんだ。宜しいか。處で、其處を見込んで、お願いだ。」

「妙な願ひだな。」

と釣寄せられた形で、くるりと向き直つて、

「何んだ、言つて見ねえ。」

スポンと筒を抜く、煙管を出すかと思ふと然うでない、するりと又箆めて、上から壓へて、

「他ぢやないがね。」

と其の煙管筒を筋違ひに――並行に胸を曲げて、耳を煙草盆に差寄せたは、是から低聲になります、恚うして、お聞きなさいの仕方。

「お互に、處で、それ其の監獄から出て来る人を、疾い話が見物をするんだがね。私は此の通り目が見えないから、口惜しくツても、什麼風だか、容子だか、些とも分らないと言つたもんです。」

其のさ、娑婆へ出た處の、態、恰好、其邊の具合、見物の様子なんか、一つ委しく話をして下さらんか。

ねえ、君、

たゞは使ひません。相當の、いや、過分の禮をするよ。

と恚う言つたら、君、又小癩に障るだらうね。處で、何うせ最初から小癩に障つてお在でなさるもんだから、癩ついでに、是非頼まれてくれたまへ。」
と故とか、書生のやいうな口の利き方をして、

「此處^{こゝ}なんです、意地^{いぢ}の悪い^{わる}、不深切^{ふしんせつ}な人^{ひと}と見込^{みこ}んで頼む^{たの}と言ふ^いのは

「どうせ何んだよ。君、盲人が、こんな場所へ出て
 しゃばつて、其處等の人を捉まへて、いま放免され
 た婦人はどんな様子ですか、如何な風です、衣服は、
 帯は、と聞いて見たまへ。按摩の癖に、と先方が別
 嬪だけ尚の事さ。」

聞かれたものは、假令柔和でも、お心好でも、穩
 當な、しんせつな人でも、私だけには誰でも邪慳に、
 突慳貪に成らうと言ふもんだ。

其處で、始めから不しんせつな仇 同士のやうな、
 仲の悪い、君を見立て、頼むんだからね、は、は、は、

と衣紋をせり上げて、
 「小癩に障る、憎い奴の頼む事だ。禮金の處は、
 随分阿漕に吃驚するほどお取んなさるが可いのさ。
 何うだね、君も商人だ、此處等が算盤の持處だら

う。

「

泰然とした様子を見せよう爲か、肩を落して、首

を長^{なが}うして空嘯^{そらうしやぶ}いたが、思切^{おもひき}つたやうで、悟^{さと}つたやうで、太々^{ふとふと}しい中^{なか}にもあきらめた状^{さま}が見^みえて――
盲人^{めくら}だけに――憎々^{にく／＼}しくも哀^{あは}れであつた。

「うむ、」

と太^{ふと}い聲^{こゑ}で、商人^{あきんど}は一つ氣^きを入れて、

「可^よかる！ 錢^{ぜにかね}金^{かね}づくなら何^なんだつて頼^{たの}まれら。

お前^{まへ}さんも可^いいものに頼^{たの}んだぜ、婦人^{をんな}にかけては恐^{おそ}らく女術^{ぜげん}も行^やる男^{をとこ}だ、委^{くは}しく話^{はな}して聞^きかせて上^あげよ
う。

何^{なに}また商賣^{しやうばい} 冥利^{みやつり}だ。禮^{れい}だつて満更^{まんげら}、盲目^{めくら}の目^めを

抜^ぬくやうな酷^{ひど}い事^{こと}はしやしないよ。

だ^が、お前^{まへ}、

と煙草^{たばこ}盆^{ぼん}を押^おして馴^{なれ／＼}々^々しく膝^{ひざ}を寄^よせて、

「恐^{おそ}ろしく氣張^{きば}んなさるぢやないか、何^どう云^いふ因^{いん}縁^{ねん}だ^ね。」

「因縁^{いんねん}とは

「否^{いえ}さ、お前^{まへ}さん、其^その婦人^{をんな}とは知^ち己^{かづ}かね。」

「知己とも、」
と言つた時、塞いだ下に眼球をいぐるりと動かして、唇に得も言はれず一種の冷笑を浮べたのである。

「其癖、何だね、別に迎に來なすつた様子でもないやうだ。」

「そりや、」
と押被せるやうに調子を高めたが、ぐツと又聲を低うして、

「當前さ。夫を殺したといふ婦人ぢやないか。外聞に係ります。身内も少くはないんだけれど、確か、誰一人として迎ひになんぞ來るものはない筈になつて居るのさ。」

商人も四邊をニし、
「ぢやあ、此の人だから、こりや皆見物なのか。おや／＼、」

と今更呆れたらしい口吻で、
「兩側は雑と人垣を拵へたぜ。すると隣の店を借

りて居る、女まじりの、（連中）と云つたやう
な一組なんぞも、矢張御見物で在らつしやるかい。

私は又大した財産家の御一新姐だと聞いたから、
こりや素ばらしい出迎だ。此の人数で引包めば、白
晝も暗夜にして、當人の淺ましい姿も、人目に觸れ
ねえで済むだらう。大樹の蔭だ、何の道もと思つて
たんだが、皆、見物ぢや、さて、娑婆へ出た處が
思ひ遣られる。」

「大分集つたかね。」
と盲人は耳を外の方へ傾けて、物音、人聲を掬ひ
込むやうに顔をしゃくつた。

「がや／＼、がや／＼、むゝ、出た／＼。」

「出たにも何んにも。」
廂の下から、小溝の上へ、半身を乗出して、
「突當りの、あの遠くの坂なんざ、蟻の這ふやう
だ。どうだい、處々砂煙が立つて居る。」

尤もな、」

と自分で合點して一つ頷き、

「坂の上の廣場にや、象の見世物があつて、其處も大概な人出だからな。」

「いくら地方だつて、今時象の見世物ぐらゐに、そんなに人が出るもんかね、皆な監獄の門が當んだね。」

「些と仰山過ぎやしないか、此處だけでは。」

お前さん、象の方も大評判だぜ。象より黒人を見に行くんだ。印度人とか亞刺比亞人とか云ふ黒人を。」

「それにしてもこんなに朝疾く
七時

七時に地獄の釜の蓋が開くんだもの。」

と見えぬ目を瞬いて、強ひて我言の眞なるよしを、
觀たさうに悶くは何故か。

四

「だがね、恚う言つちや如何だけれど、物見高いことに掛けては、日本國中何處へ出しても餘り敗は取らない御國柄だ。私あ度々御世話に成りに来て知つてるけれど、」

と言ひかけてフト口を噤む。八百屋が来て、小溝の前に荷を下ろした。ト荷繩を捌いて策の兩方へ天秤を渡したから、今日は、と此の荒物屋へ入るだらうと思ふと、然うでない。悠悠の紐を解いて、脱いだのを片手に提げて、徐ろに其の天秤棒に腰を掛けた。仕込みも少いか軽さうで、白露かゝる青物には、しなはなかつた商賣道具が、椅子に成つたのでギウと鳴る。

笠を取つた段は、切案ずるに、（前の人帽子を）
 と言はれぬ前の、大入場の賢い用意と見える。

是に機を得て、五六人ばら／＼と、吹寄せられた木の葉のやうに溜つて来た。就中八百屋と並んで立つたのは、古洋服の腰辨當、口髯を生やした中爺さ

ん。

トばた／＼慌しく奥から驅けて来たものがある。
仲仕切の障子の破れから店前を覗いたのは、荒物屋
の女房で、表へ寄せて来た跫音に、驚破で誘はれた
ものらしい。

「まだ／＼、どうして、」
と言つて濡手を拭いたナ、前垂のすれる音。

「時間によならぬ。七時かつきり懸直なしぢ

や、

と男の聲、四五人が其處にも居る。

盲人はものゝ氣勢に聞く耳立てゝ、

「何か、何か来ましたか。」

「見物、見物、」

勿論低聲で、

「そうらね、だから言はないことではない。御門
跡には大屋根へ上る。舊藩主がと申せば、橋の上へ

莫座を敷いて土下座だ。一頃なんざ、天狗煙草の廣告が珍らしいツて押返したわ、近在から握飯を背負つて出掛けたもんだね。

だもの、お前さん、片や、亞刺比亞黑人、片や、紅蓮の池から雪の膚出現とお出でなすつたんだ。坂の上下轉しますぜ、引くりかへるやうな騒ぎや當前だ。おゝ、おゝ、」

三四名、巡查が出て来た。

「御人拂、御人拂、下アに、下アに　ー　ー
と商人は浮かれ氣味で、

「はゝゝはゝゝ、世話はねえ、追散らされゝば、ぞろ／＼と黒人見物。直ぐに立停まつて別嬪迎へだ。

あゝ、あゝ、おつと、壓されたわ。えゝ、おい、串戯ぢやねえ。目の腫ぼつたい、鬚がツくりといふ婀娜なものが出ましたぜ。寢床から駆出したと見えて、風に吹捲られたと云ふだらしない風をして。やあ、故と壓す奴がある。はゝはゝ、何處の國も變らない。どつこい。溝へ落ちまいぞ。此方の溝ア甘えぞ。」

ちゆ／＼と鼠鳴ねずみなきをして、何時いつの間まにか突立つゝたつて、背伸せのびをしながら、又笑またわらひ、

「こりや可いい、こりや可いい。兵隊へいたいさんが、緩々のそり／＼と四五人にんづれで行いつたり來きたり、監獄かんごくの前まへを歩あり行き出だしたわ。むゝ、咎とがめ人てがなくなつて洒落しやれて居ゐる。おまけに今日けふは日曜にちえうだ。コリヤ、」

「君きみ、君きみ、」

と盲人まうじんは膝ひざをずらし、漸やつと拔出ぬきだした煙管きせるの皿さひらで、縁臺えんたいをこと／＼遣やり、

「門もんが開あいたら直すぐに頼たのむよ、うつかりしないやうにな。」

「然さうだ、」

と心着こころづいて又腰またこしを掛かけた。

「大丈夫だいぢやうぶ、まだ／＼監獄かんごくの門もんは夜よが明あけないやうに寂然しんぜんとして居ゐら。」

だが、何なんだぜ。其處等そこいらの様やう子すもと言いふ註文ちうもんだから、今いまのなんぞも勘定かんぢやうの中なかへ入はいるだらう。商人あきんどは此處等こゝいらが算盤珠そろばんだまだ、何どうだね。」

盲人まうじんは苦笑にがわらひして、頤あごを空そらざまに倣然がうぜんと空そらへ頷うなづき、
「まあ、可いいさ。」

「でも、先刻さつきは何なんだぜ、地獄ぢしやくの門もんまで見通みとほして、
正しやうめん面じやうとう上等さじきの棧敷さじきだつたが、それ、何かなにと申まをす内うち
に、略あらかた此處こゝの前まへも充満いつぱいだ。見るみのに骨ほねが折をれよう
から、些ちつと増まして貰もらはうか、」とさすがに忍笑しのびわらひ
をして、屈かゞみなりに上目うはめで見み上げる。

五

盲人は悠々と煙草を捻つて、

「勞力盗みはしないから、」

と考るやうに顔を曲げつゝ、

「成程　――　此處の前も塞つたね。お庇で暖い

が、其かはり曇つたやうに暗くなつた。他は推して

知るべしか、」

と俄然漢語を使つたが、身體も急に乗出して、一服深く吸ひつける。

「知るべしだとも。」

何か知らぬが負けない氣らしく、堅くるしく應答して、

「軒毎に旗を出して、提灯を點けないばかりさ。」

「萬人に面を見られるか。へへへ、業曝しな、」

と煙管を引いて乗上つて、打棄るやうに蔑んだ語氣で呟いたが、得意は滿面に露はれた。

顔の色を窺つて、

「憎らしく言ひなさるが、何かね、亭主殺しだつて、お前さんは其の殺された人と懇意でゞもあんなさるか。」

「兩方ともさ。婦人の方は、島田に結つて緋手絡を掛けた時分から知つてるんだ。」

と知つてるんだに恐しく力を入れて、吸ひさしの煙管を握つた。細長い指がふる／＼と震へ、

「いつでも手を引いて貰つたもんです。」

とニツと微笑む。此の微笑は自分が目が見えないから、何時の間にか人は見ないものと思ひ極めて、其の以後はじまつたものらしい。語をかへて言へば、臆面のない獨笑である。

商人は忌々しさうな様子で、一寸面を背けて、

「亭主殺しと手を引いたとなつちや、お前さんも掛り合ひだらう。」

「まあそんなものさ。」

丁と煙管を拂いたが、灰吹が向うへ揺れた。あと

を一つスポンと吹くと、なごりの煙がたまになつて
スツと出る。

其奴を狙つて、吹飛ばして置いて、

「緋い手絡の島田鬻か、」

と不意に唯饒舌ると、盲人は眞面目になつて、老
實なものいひで、

「質實な娘で、銀杏返が好きで、それで毛が有り
餘るもんだから、髪結が殺し兼ねると言つたツけ。

色が白くつて髪かみの艶つやが好いとなると、何なにに結ゆつても
似合ふんだ。

半襟はんえりの色いろだつて、や、紫むらさきは色いろを白しろく見みせることの、
淺黄あさぎは媚なまめかしいの、黒くろは強過つよすぎるの、と選好えりこのみをす
るにも當あたらずか。おまけに目めの好よかつたツたらない
んだもの、

と目めさきにちらつきでもするやうに、盲めしひた目めの
働はたらきは、縦ほしに、宙ちゆうの幻影まぼろしを追おふが見みゆ。心こゝろのゆくまゝ
煙管きせるが搖ゆれてー。

「大分だいぶん委くわしいね。其そのくらゐ見みえりやお前まへさん、
目めの通辯つうべんは要いりさうもないもんだ。」

と冷評すやうに嘲つたが、自分が其の目の通辯たるに心着いて苦笑ひ。

「そりや久しい馴染だからだね。いきなり其處へ来たんぢや、衣服の色なんか分りツこはない。それも近間ならばだけれども、こんな處から見ると、

「

「膚はどうだ。」
と商人は唐突に言つた。巫山戯た状で。

盲人はまじ／＼と、
「あんな處に入つて居るんだ、白い上にも、雪だつて、綿だつて、較、べものにはなるまいが。」

「否さ、お前さんの觸つて知つてるさ。」

「手が、私を引いてくれた手が。」
と口をあけて、

「手、手の其の綺麗な、柔々と、華奢な事なん

ね、」

周圍しゅうゐが、ものゝざわつくほど、彼等かれらの談話はなしはひつそりとなつた。

「何なんだらう、いづれ派手はでなものにや違ちがひはないが、成ならう事ことなら緋縮緬ひぢりめんに願ねがひたい、色いろが白しろいと引立ひきたつぜ、昔むかしから悪わるくないもんだ。」

「まさか、そんなもの。それに質素ぢみな婦人をんなだから、以前いぜんから然さうぢやなかつた。年とし紀とも取とつたし、」
と（内うちの）のゝやうに親したしく饒舌しゃべる。

「幾歳いくつだ。」
「今年ことし丁じやうど（三十）になるのさ。」
「へい、だつてお前まへさん、緋ひの手絡てがらで島田しまだだと言いつたぢやないか。」

「それは、」
と大おほいに意氣組いきぐんで、急きふに顔色かほいろを颯さつと變かへ、
「それは、結納ゆひなふの祝いはひのあつた晩ばんの事ことだ。」

「結納？」

「彼家へ縁附く時さ。」

「彼處へツて、」

と一度句切つて、商人は更めて、

「一體、何處の家の御新姐なんだ。別嬪が監獄を

出ると聞いたばかりだが、」

「他國の人ぢや、然うかも知れん。土地では誰一人知らないものはない。此の騒ぎを見ても分るだらうがね、山名と言ふ豪商だ、尤も其後微禄をして、はや跡方もないけれど。」

商人は聞く中に目を圓にして、

「や、山名の、」

「知つてるのか。」

「知らねえで。ぢや、あの評判の奥方か。」

「知つて居るね、む、」

「見た見ないは格別、此の土地を知つたほどのもので、あの奥方の事を聞かない奴があるもんか。薄茶の中へ毒を入れて、山名の旦那を毒殺した一件だ。」

私等が國の方でも今頃だつて一つ話だ。と烈しく身體を揺りながら、腰掛けた脚をばた／＼とやつて、

「串戯ぢやねえ。私も随分オイソレもんだぜ。人先に駆出して來ながら、何處の什麼罪人だか氣がつかなかつた。然うか、山名の一件か。餘り目立つたことだから、眞晝間だと思つたばかりで太陽を見ないと同一よ。」

こりや、拜まう、確乎見物するこつた。と胸を搔合はせて、はだかつた裾を引張り、

「黒人を引合ひなんざ勿體なかつた、お月様に炭團で居やあがる。道理こそ」

とまだそは／＼して、きよろつく次手に、更めて、盲人をしばらく熟と、見惚れた氣が、其處へ打附つたやうに膝を叩いて、

「お前さん、」

「むゝ、」

「ぢやあないか、なんぢやないか。えゝ！ 裁判
中に、毒殺の連類だつて名告つて出た盲目があつた
つて、騒いだが。」

「知つてるか。」
と横柄に言つた。

吃驚するか、顔色でも變へるだらう、と瞞めて居
た商人は、其の大面なのに氣抜きの體で
ト大いに我折つて、

「呆れたもんだぜ。」

「呆れが禮をするから可からう。」

と洒落のやうなことを眞面目にいつて、煙管の雁
首を吹く鼻息、フ、ン。

「亭主殺しは未だ見えんか。」

羅綾にも堪へまじきが、不思議に監獄に生存へて、
刑期満ちて、今朝放免されようとする山名の夫人が、
毒茶を似て夫を殺害した。事の發因は去ぬる年、五
月の初め、雨上りの月夜であつた。

七

松の葉越の月明く、柳の影は暗かつた。兩岸には
 ちらほらと、鷺も鴉も見えさうに、雨あがりの空、
 水の色、澄渡つて蒼きが中へ、一條の橋は灰白う、
 霞のやうにかゝつて、神か、人か、渡るものを古か
 ら靜に待つて居る趣。

刑事は町盡から、山の方へ、其の一の橋を渡らう
 としたが、向う岸から流を覗いて、黒髪を水の中、
 緑の色の滴るやうな、山の頭を打仰いで何ともなし
 にゐんだ。這般職責にあるものさへ、兎もすれば月
 の風情にあこがるゝは、我が敷島の習ひにこそ。

トしとやかな足取も、恚る折から能く聞える。か
 らころ、橋板を渡る音して、月の下へ影がさした。
 其の影よりもすらりと高く、低い欄干を裾にして、
 やがてゐんだ婦人がある。

刑事が控へた方からだ、對岸の月夜を仕切つて
 繪襖のやうに見える、山の根に、柱も屋根も肉落ち

て、明いだけに骨の出た、古家が五六軒。一世紀ばかり前の廓の跡が、淺ましい其の俵を残した處で、中には二階家も現にあるが、何處のか物置に使はれる。店を壊して奥座敷に、世拾人のやうに暮すもあり、時々、出水に暴されて、根太を繕ふ力なく、中二階に所帯して、泥田に變つた池の鮒を、茫乎釣つて居るのもある。住む人のないではないが、蝙蝠の数は、はた其よりも多からう。月の光に消さるゝとは言へ、戸を漏る灯影は一つもない。

其の孰方の軒を離れて出たか、橋に彷徨ふ婦人の姿。思ひなしに悄然と流に臨むで、帯のあたりを欄干で劃つた風采、躍り入るまでもない、がつくり一呼吸引くが最後、泡に消えさうに思はれる。要こそあれ、身構へして、屹と見た刑事の瞳に、敏く映つて、認めたのは月恥かしき顔よ。

市に随一の貴婦人だつた、美波子といふ、豪商山名の令夫人。梅、桃、櫻、海棠の、爛漫として揃ふ席にも餘り聯つたことのない、籠勝ちな婦人であるから、其の俵は音に聞くのみ、見知らぬものも多か

らう。但此の刑事は職掌柄、其の容色に接して居た。

一度瞳に宿つたものゝ、夜目にも見紛ふことはない。世の罪惡をばかり見る梟の如き刑事の目にも、美しき色は月の光とゞもに、明かに宿つたのである。

川向うの何の家か、其の邊の一室を借りて、竈の下に灰までも、旋風に吹去られたやうに分散の悲境に陥つた、山名の主人藤次といふのが、火事場のあとの幻に似た、細き煙を立てゝ居ることを、警察だけは知つて居た。人は皆、跡を暗まして、他國へ出奔をしたと思つて居るので、刑事自身さへ、此の婦人が、夫とゞもに此邊にあらうとは思ひがけぬ。蓋し山名家没落の際、美波は其の實家方へ引取られて了つたから。

尤も家計上分れたゞけで、縁は其のまゝ妻、夫。藤次の隱家に訪れたらう、それに不思議はなかつたが、心がゞりな橋の上。

驚破、其の立姿、峰の影に分れたら、月に二が、
るであらうと、將に駆け出さうとする時、早や水の
音が沈んで、ドブン。僥倖、一條の絲が、夫人の手
から、欄干を越して、川面に繋つて、其の人はあり
のまゝ。絲や、玉の緒の影かと思えたが、非ず、流
を汲む綱だつたのである。

頃刻して水を離れたのは、一個の釣瓶で、雫は小
蓑を顫ふやうに亂れかゝつた。

此の界限の衰微も、一つは其が困を爲さう、一の
橋あたりは、井戸が悪く、殊に雨上りは全然泥水。

飲用水を中流へ汲みに、と合點が行くにつけても、
水仕の業が、其人だけに、刑事の目には尊かつた。

昨日までも青柳の絲を釣瓶に結んで、玉轆轤を曳かせた身が、と刑事は優しく思遣り、近づいて其の釣瓶を手傳はうと、我知らず片袖をかゝげた時、又もや、橋向うへ一個の人影が露れて、中程へ來かゝると、黒い上衣を片腕に引掛けたが、外套であるらしい。紋附さうな羽織を着て、着流しの姿ではなかつたから。

中折帽の色は分らず、中脊と見えたのが、時に川水を汲上げて、月の光で蓋したやうに、釣瓶を橋の上へ置いて、一息つきながら、刑事の方へは背を向けて、家路へ立直つた夫人と、出合つたと思ふと、男の頭が、低く且つ圓くなる。

挨拶をしたらしい。山名的美波も、半纏か、羽織か、其の端が細腰にひたと着く。

直ぐに二言三言、言交へたやうだつたが、腰蓑のないばかり、釣瓶が松風の裾まで上ると、男の影は

中腹ちゅうしになつて、底そこへ手てをかけたものと見える。綱つなを
控ひかへた、お美波みはの白しろい手ての下したから、颯さつと傾かたむけて、川かは
水みづの満まんを引ひくと、新あたらしい月影つきかげが、ひたノノと婦人をんなの
背後うしろへ濡ぬれ擴ひろがる。

醉よつたやうな足取あしどりだ、と刑事けいじが心着こころづく時とき、夫人ふじんの
駒下駄こまげたは入交いれかはつて、再ふたび欄干らんくわんに臨のぞんだと思おもふと、男をとこ
の形かたちが衝つと寄よつて、其その綱つなに手てを掛かけたが、釣瓶つるべは
ふらノノと左右さいうに揺ゆれて、井戸いどならなくに朝顔あさがほに、
月夜鴉つきよがらすの纏もつれた風情ふぜい、雪ゆきの頸うなじも黒髪くろがみも、袖そでも裳もすそも摩なび
いたのである。

さては、汲くみかへむとする程ほどに、否いな、我われこそとや
争あらしふ、と見みると男をとこはつかノノと、ものノ二三尺じやく衝つ
と退さがつた。

釣瓶つるべはニはつと落込おちこんだ。綱つなは手てに控ひかへながら、お美
波はは水みづを汲くまうともしないで、斜ななめに男をとこを打見遣うちみやる、
肩かたつきが細ほっそりと、鬢びんづらに風かぜの添そふ状さまで、鼻筋はなすぢの通とほつた
立姿たちすがたは氷こほりついたものノヤう。

二三分経つてから、急に言が入交つて、囁くともなく語ふ聲。聲の響が影になつて、空に雁の描かれやう。言の音に浪あつて、水に文字の映るやう。俯し且つ仰いで、漫に其の言語が見たくなつた。刑事の耳には、偏に流の音が哄と高くなつたばかり。却つて風を傳ふ妙なる薫が、ほんのりと來て、其の面を打つた。二人の聲は、花の香の迷ふに似て。

堪らず、履物を脱いで、刑事は跣足で、蹲ると、身體を押して橋詰から、欄干の外へ廻つて、板の端を流の上。

五寸には足りない處を、烏打帽の庇の下に、袖口を組んで押立膝、拱いた腕を支へ、棚の達磨さんを一寸、熟いもの。

摺足の音を忍んで、目ばかり光らし、むく／＼と尻で渡りはじめた。

固より氣取られるやうな手練でない。首尾よく、二人が右に立つた其の左の欄干の外まで辿つて、占

めた顔に差出した。聞く耳に、ざぶり水の音。

釣瓶は夫人の手にきり／＼きり、聲は其時八々と止む。

話が着いたらしい、釣瓶は川水を湛へたまゝ、
髪の毛のすなほな、目鼻立の好い、學生上りらしい、
（刑事の目に）羽織、袴の薩張した扮装の、三十
恰好の男の手に渡つて、婦人は夜風に袖を組んだ。

髪は飾りのない、しかし、鬚のふつくりした銀杏
返で、帽子を脱つた天窓と、やゝ對丈に並んで、肩
を合はせて、早や歩行き出す、跫音、水の流の音。

（チヨツ。）

舌打を袖で包むで、其まゝ蛙で二三間。零れて一
文字が月下に長い、釣瓶の傾くの横ざまに見た時、
男の、其の左手の腕に引掛つた――外套であつ
た――持物が、はらりと橋を引摺つた。

あとで見ると、夫人が月下に着て居た羽織は、中古ぢやあつたが紫紺に、白で細い雨忍の、お召縮緬であつた。其の右の肩がしなつて、今、引摺つた外套の下へ、袖を差入れて擡げて遣る時、あらぬ方を見向いたのが、人なき様子を伺つて、其處で手を握つたやうに考へられる。

恚う云ふとは、黙りですること、唯雙方の掌へ心が籠るのだ、と見て取つて、刑事も拳を握りざまに二足三足あとをつけた。

二人は橋を渡り果てゝも、何もものは言はなかつた。同じ姿勢で、橋詰を左へ切れ、筋違に見える、低い格子戸の前へ留まつて、唯筵戸でないばかり、婦人も屈まねば潜られまい。軒の低い茅屋で、表の蔀は夜だから下してあるが、大な落書が薄茫乎相々傘だの、變なものだの、中にも天狗の面などは、月に倂がうかぶくらゐ。恐らく三十年五十年前の古筆であらう、今時こんな處へ立つて、惡戯をするもの

はありさうにも思はれぬ。

晝間は其處を店にして、一人住みの婆さんが、墓参りの、花、線香などを商ふ、傍ら、草履、鼻紙なんど。此の春、此の邊へ白首が立廻るといふ噂があつて、夥伴が目を附けた事があつた。此の花屋なぞも、納戸が怪しまれたものだつたが、何事なく沙汰が止んで、やがて暗夜になる。と、又人魂が出ると云つて、橋向うへわや／＼と人ばかり。五人七人眞夜中まで固まつた影さへ残つたが、卯の花くたしが降りはじめては、宵から提灯の影も消える、丁ど今が間の節で、最う些と經つて、螢の一番が顯れるまでは、蝙蝠を追ふ長棹も、此處までは届かない。

門口で、又言が交はされた。美しい男女が、慥、うして口を利く時は、動かぬ姿も薫のする時、花の何となく揺れるやうな氣勢があるのと、視める目に似るのである。

刑事は、聲の移香の、手に取られぬのがもどかしかつたが、生憎身を忍ぶ樹立も隈もなかつたので、

橋の外に蹲んだまゝ、睨み詰めて居ると、男の手が、釣瓶をばつたり、落した、いや、擲つたと見て取られた。

横倒れになつて、軒の下へざつと流れかゝると見るや、怪飛んだやうに、橋へ上つた、男の姿は、星の精の飛ぶ如く、欄干の間を縫つて、町の方の、土手の松へ消え込むだ。

裳をすら／＼一二三間、門口から跡を追つた夫人の手は、ハタと橋詰の欄干にかゝつて、足が留つて、伸上るやうにして、相手の馳走つた方を視めた時、同一其方を見送つて、むつくり頭を擡げて居た刑事は、ハツと心着いて、サソクに腹這になつて忍んだ、蛇の如く長く。

知られて憚るわけはないが、何故恚うしたか、自分にも分らない。恐らくお美波の天命の、然らしめたものであらう、と刑事は後に語るのであつた。

背姿しを／＼と、お美波は力なげな足取で、差俯

向きつゝ元の門口。しばらく寂しさうにイんだが、
漸々倒れた釣瓶を起し、片手で地を搔探るやうに、
網の端を拾ひ取るまで、如何なる時にも其の氣高さ。
此の世の人とは思はれず、たゞ月に描けるものゝや
うであつたが、がた／＼と格子戸を開けた時は、恐
ろしく影が窺れた、世話女房の風采で。

寄つた。
騎虎の勢、刑事は、其の消えたあとの門口へ密と

足袋が冷りと踏込んだは、今の水のこぼれたので、
手で掴んで、月明に踵を透かして、泥だらけになつ
たのに、又舌打しつゝ、びたりと格子に附着いた、
恰も其の小店の蔀の落書の影に髣髴として。

對手は云ふまでもなく、其の夫であらう。刑事が
此處で聞いたしめやかに語らふ聲音は、戸の内だけ
に極めて陰氣で、先刻のが、ほんのりと唇を撫でる
花の香なら、これはしん／＼と眉を襲うて、霜夜の
露の凍る氣勢。

時間じかんに積つもると餘程よほどであつたらう。納戸なんどの話聲はなしこゑがぱつたり止やんでからも、未だ立離たちはなれることをしないで、戸口とぐちに附くついた刑事けいじは、引入ひきいれられさうな心地こゝちがした。

尤もつとも、此この人ひとたちに、露つゆばかり嫌疑けんぎがあつたのではなく、餘あまり夫人ふじんの美うつくしさに、偶ふと然そ其はなしの話聲こゑを間近まぢかに聞きいて見みたかつたに過すぎなかつたのが、思おもはず恐おそろしい犯罪はんざいの、現場げんぢやうを見みる事ことになつたのは、刑事けいじが所謂いはゆるてんめい天命てんめいであらう。

あゝ、茫乎ほんやりして眠氣ねむけがさした、馬鹿ばか々々しい、と生なま欠あく伸びを噛かんで、最もう去ゆか、うとした耳みみを挟さくつて、然さも苦くるしげな呻吟うめきごゑ聲こゑが、納戸なんどから絲いとを震ふるつて、ぶる／＼と刑事けいじを驚おどかした。

ヒイと忍しのび泣なきに悲鳴ひめいを包つんだ婦人をんなの聲こゑ。昨日ゆうべ夜よあがりの、又また雨催あめぢよひか、月つきに暈かきのかゝつたのも、折をりから尋常たゞごと事ことにてはあるべからず。

(御免、)

と刑事は、對手の身分を知つたゞけに、相應に會釋はしたが、格子戸を蹴開く勢。暗がりには馴れた目にも、土間に躍込んで何にか躓いて、はずみを啖つて、ばつたり突當ると、襖が倒れる。

一間は陰々とした燈火に、墓の中を透す光景。月も花も穴藏の底に沈んだかと、二人は頭を入違ひに、はたと破疊に俯向き伏した。

瀬戸ものゝ火鉢に、火はあるが、瓦の色に火氣が弱つて、鐵瓶の湯氣も絶々で。

其の鐵瓶の蓋を外して、柄杓が斜ツかけに乗つて居た。火鉢の前に、黒塗の棗の茶入、茶筌が並んで、其處へ突のめつたのは山名藤次。羽織は着ず。慌しい場合なれば、品物は氣がつかなくつたが、鼠の茶の縦縞の、さすがに小薩張した袷を着て、帶腰の形素直に、角帯をしめた、衣紋がうしろへ脱げて、黒八の襦袢の半襟が見えた。

横へ、前髪を落とし合はせて、身体は疊のへりをか
け、眞白な手首で額を疊に擦つけて、片袖胸へ搔込
むで、犇と乳のあたりを壓すらしい。脇あけをこぼ
れて、はらりと紫の散つたのを、腸や溢るゝと驚い
たのは、非ず、帯に挟んだ鹽瀬の袱紗で。

飛込んだ人の状に、衝と手を疊に身を起した、夫
人の顔はつゝがなかつたが。

襟首に手を掛けて、矢庭に背後へ引仰向けると、
藤次の唇は血を嚙んで、俯伏になつて疊についた口
のあとは、眞紅な土蜘蛛の形して、堆かりし鮮血。

（婆々は居らんか、婆々、婆々！）

と刑事は、見る／＼天眼に白くなりゆく、藤次の
瞳を二めながら、どん／＼足踏をして呼はつた。

唯、夫人は絲織の細りした、膝を中腰になつて、
羽織の紐の解けて居たばかり、袱紗も落さず、襖も
亂れず。

(お水を持つて参りませうか。)

善か、悪か、言ふこともうつとりとして居る。

(奥さん。)

と屹と見た、刑事の眼は狼の如く輝いて、

(何うしたんです。)

(はッ、)

と言ふのが溜息のやうで、衣紋の外へ動悸がうつゝ
た。驚いたやうに下へつく手が、膝許の薄茶碗に觸
れたと見ると、片手に藤次を抱いたまゝ、刑事の猿
臂は衝と伸びて、稻妻の閃く如く、鋭く、夫人の手
を拂ひ退けて、

(觸つちや不可ん!)

と怒鳴つて、

(動いてはならんだ。)

夫人の姿は、絲を抜いたやうに崩折れた。

トタンに呼子笛が、刑事の口で高らかに吹鳴らさ
れると、寂とした川浪に、恰も無人島あたりに響く、

難破船の汽笛の如く聞えたのである。

式かたの如ごとく、やがて朱筋しゆすぢの提灯ちやうちんが入いり亂みだれて、靴くつを穿うがつた黒い脚あしは、恰あたかも根太ねたを抜ぬいた竹たけの如ごとく、幾條いくすぢともなく縦横じうわうに一室ひとまの間うちに入いり亂みだれて、唯一たゞひとり夫人ふじんの状さまは、昔語むかしがたりに傳つたへたる八岐やまたのをろちのまへ前に頸うなじを垂たれたひめ媛に肖にて居ゐた。何時いつの間まにか髪かみも解ほどけて。

藝妓まじりに人雪崩を打つて、哄と橋詰へ押寄せた群集の中に、用達から歸つた家主の婆々は、唯くる／＼と廻つて居た。

家は犇と鎖された。

直に腰縄を打つて拘く處、後れて來た警部の計らひで、荷車に乘せて橋の音、とゞる虚空に轟かして、夫人を將て去つたのである。

輪の軋る音は、眞夜中の月の前を、折から立蔽うた黒雲に、遠雷の如き響を殘した。

此處に立ち盡したものさへある。明くれば一國唯是沙汰。

降り出して小止みのない、五月雨の雫とも、其の風聞の絶間はあらず。じと／＼と濕つて來て、汗するばかり人々の耳に聞えたのは、山名の夫人が、

夫を毒殺したと云ふのである。

現場に有合はせた、薄茶々碗に、未だ飲さしが残つて居た。毒は其の中に交へてあつて、刑事に見咎められた時、お美波は其を取棄てようとしたとも云ふし、又言譯のなさに自分も飲まむとしたのだなども傳はる。

で、此の犯罪には共犯がある。それは毒茶が煮らるゝ前に、夫人が川水を汲みに出た時、豫て打合せがしてあつたと見えて、恰も橋の上に来て、釣瓶繩に摺れつ纏れつ、もろともに水を汲んだ、學生上の清げな若もの、勿論密夫に相違ない。怪しからざる淫婦姦夫、世の見せしめに其の釣瓶繩で、一緒に紋罪にして了へ、と口々に喧しい。

尤も湯の中にも毒があつた。最初、其の密夫の手から、水へ投込んだものだとある。

一日新聞が號外を出した。其の密夫が捕縛になつたと、否、名乗つて出たと。満目聳動、

是如何なるものぞ！ 瀧山澤夫、自分で澤、又、澤と名告る人も知つた金持の按摩である。

はッ恐れながら、姦夫は手前で。山名の御新姐が、未だ縁附ませぬ、緋い手絡の時分から馴染めまして、人の女戻となりまして後も、繁々深閨に出入をいたし、盲目の便宜には、人目の關も破り易く、首尾よく媾曳を重ね居りましたる處、山名家分散いたし、お美波は實家方へ返されますし、又、主人藤次出奔と聞えて遠國仕りましたれば、即 離別も同様。やがては表向 申入れ、手前宿の妻にもと彼是内談いたし居りました折から、籐次事、美妻のために心ひかされて浮ばれ申さず、一の橋の暗の夜ごろ、獺の如く立露はれ、實家の居廻りを迷ひ歩き、ものゝたよりによぼうに女房を呼び出し、偕もろともに姿を隠せ、一緒に遁げずば、殺すなどゝ、附廻しまするため、遁れ方なく、一先づ其の隱家へ伴なはれましたるなれども、あれは盲目の手前と申しますものござりまする故、土地を離れまする段思ひも寄らず。然れば膝突合はせた埴生の小屋、手前忍びまするに屏風の影もない始末。切なき思に瘦せます上、活計とてもな

い飢死の境遇。旁々内談を極めまして、以前の數寄が猶留まぬ、藤次がもの好みを幸に、一の橋の水を汲みました時、毒を加へましたは私、薄茶手前に託せて一服飲ませましたは彼めにござりまする。恚く成りまする上は、毛頭祕し立ては仕りませぬ。お美波と同罪仰付け下さりませうならば、八裂とても厭ひますまい。

と横木に涙を流したと記したのである。

天地大變、此で長濕氣の梅雨も明けようと騒いだ
が、盲人澤夫は、日も措かず、叱り下げられた。

固より當夜の相手の風采、臍氣ながら其の容貌、
刑事が認めて居るのであるから、澤夫を見ると唯一
目で、其の眞面目顔に噴出したほどだつたが。

豫審判事は、しかし、澤夫の家が、仙丹と號する
金看板、先祖傳來の藥種を商ふ家である處から、或
は毒藥の出處と、慎重に取調べたけれども、何の取
留めた事もなく、色情狂め、と大目玉で。

押丁が、

(下^がりませう)

此の號外は稍滑稽であつたが、二度目に出了た初號活字の報道は、沈着に世を動かした、恰も地震の如く。

一頃、東京のが此邊まで大騒ぎだつた、悪三郎とか云ふ一大毒殺事件があつた處から、記者は、第二大河三郎と標題を置いた。

市を去十里ばかりの温泉で、湯治中捕縛になつた、山名夫人の密夫、即ち毒殺の共犯者は、誰あらう！

此度新に東京から、當地工業學校繪畫部の教頭として就任した、西洋畫家、然も以前は市の貧民の孤兒で、謂はゞ故郷へ錦を飾つた、興津志乃吉である。

思はざりき、俊秀月の如き面の中に自づから堅忍不拔の色ありとて、其の小影を紙上に掲げ、五日に互る履歴を記し、學生の龜鑑と稱へ、東洋の花と

歎美し、予等爰に相計りて、氏をして市の東丘なる
梅林の中に、手づから月桂樹を植ゑしめむとす。諸
子、それは是に鑑みよ、と絶叫した美術家の、一朝忽
如として大悪の淫魔と變ぜむとは。記者は今や、毛
穎を嚙んで唇裂けなむとす、**二**噫、嗚呼、嗟乎と呻
くこと李太白に異ならず。

で、事實は恚いである。

毒茶事件の當月夜、一の橋の上で、略其の風采に
接した刑事は、事爰に及んで、何條些とも猶豫すべ
き。假令ば目前に影を捉ふるやうな罪人を、一刻の
遅延は一生の瑕瑾と、地蹈鞴を蹈んで、血走つた眼
に、やがて其の西洋畫家の、浴衣姿を縛り得た。

證據手懸りとて別にない。唯臙氣に見たばかりを、
さて取檢べる、と正に一の橋橋上の客なる由。天網
免れず、白状に及んだ、と號して、刑事氏の眼は淨
玻璃の如矣。惡魔は藕絲の孔中と雖も其兇影を潛め
得ず。見よ、炬の如き炯眼を。毫末も心に疚しきこ
とあらむもの、一見して毛髮豎立せむ、是を愼めや、

讀者、と又其の寫眞を
―― 新聞に
―― 掲
げたが、何故か、刑事の肖像は、可笑く眦が垂れて
居た。

續いて此の名刑事の、探偵苦心談と言ふのが麗々と記載された。

苦心とても唯橋上の客が、微酔を帯びて居た處から、二の橋あたりの料理店に當つて見ると、其日午過ぎから某の樓上で、工業學校の教授連が、新教頭のために開いた歡迎會があつた。

して／＼其の新教頭興津志乃吉は、となると、飲めない酒を強ひた所爲か、翌日忽ちに病氣届けが出て、今は或温泉に靜養中との事。出先から同僚へ手紙も届いて居るくらゐ、南無三、風を食つたわ、と葦駄天二人曳後押で駈附けたまでの談。草を分けるまでもない、有名な温泉宿だから、番地を探す手数さへなかつたのに。

苦心談には、且つ此の刑事が、一の橋の欄干外を

渡つた事を、特筆大書して、故ある哉、是ある哉、
警察部内に於て、一來刑事、と渾名する飛鳥の如き
名人とて、と遣つて、そも／＼一來たるや、昔宇
治川の合戦に、と註したのである。

然るに此の刑事が、欄干の外を渡つたのは、生れ
て以來、其の晩が最初であつたと。何う
して出來た渾名か知らぬ、新聞の記事は神聖である。
従つて警察は預言者であつたのである。

物好きな市民の内には、此處が、と雨の中をわざ
／＼の橋へ出張つて、懸賞で、其の欄干外を渡つ
た。

白玉か何ぞ、と問はむ上臆の、鬼に取られて露よ
りも脆く消える身も、地獄の白洲では死にはせぬ。
針の山に追はるゝに、羅の腰も靡くでないか。

山名の夫人も生命があつた。

係官が問へば應へたのである。されば未だ聲も出

るのであらう。たゞ空蝉の果敢き状で。疾く此處を
斬れかし、と雪の頸を差伸べた。橋の上で出會つた
と云ふ男を問はれた時は、言ひ淀んで震へながら、

(存じません。)

係官は物和かに、

（知らないと言つてはなりません、此處は、貴女の家ではないから。又お祕しなされるのは、其者の爲にならない。貴女が男に出會つた事は、見たものがあつて分つて居る。早く其の名を言ふが宜しい。）

夫人は端麗なる顔を僅かに上げて、

（男の方には逢ひましたが、誰方が知らない方なのでございます。）

（では何うしたのです。其者と何う云ふことをしたのですか。）

（私が一釣瓶汲みました時、傍をお通りなさいまして、咽喉が渴くから飲まして欲しい、とおつしやいます。さあ、召食りますやうに、と申しますと、釣瓶から快く口移しにお飲みなさいました。水が覆れましたから、最う一度汲みませうといたしますと、自分の所爲で苦勞を懸けて、お氣の毒に思ひますと、しんせつにお手傳ひ下さいました。たゞそれだけでございます。）

(しかし現場を見たものは、其の間に、可なり長い間、密談をなすつたと申します。何を話しましたか。)

(はい、)

と言白んだ、夫人の臉が薄く染まつて、

(好い景色でございますの、佳い月でございますのと)

(歌の話でもしたのですか。)

と係官は片頬に冷かな笑を含んで、

(それから、釣瓶を提げて歸つた門口で、其男が釣瓶を投げるやうにして、急いで駆出したのは何ういふ譯です。)

(水が充満で重からう、と御自分でお持ち下さいましたのでございますが、少々酔つてお在でなさいましたやうで、お落しになりました。急いでお歸りになりましたのは、釣瓶を覆して氣の毒だと思ひなさいましたのでございませうと存じます。)

美波の言に、言ひ知らず情が籠つたゞけ、男の嫌疑は尚増した。

興津志乃吉が、温泉で捕縛に成つてから、其筋の消息はしばらく暗闇の中に葬られ去つたが、新聞の記事、街上の巷説、畫家が密夫であることは、日に日に人に確められて、この極悪人、と其の父祖の墓を考へ、石碑を覆したもののさへあつた。

公判が開けると、夫人の前言は、公に、志乃吉の自由に因つて取消されたのである。

新聞は、其の太々しさ、面に唾せむと痛罵したが、美術家は、判官の面を仰ぐ事、恰も書架に對するが如く。

當日は午後から、歡迎の宴に侍し、夜に入り、時間は覺えず、月が良いので、唯一人、歸途を町盡へ出て、一の橋へ廻りました。

紺屋職人だつた、父の家は、一の橋近邊の小屋で

したから、懐しい處なのです。

酒氣があつて、咽喉が渴いて居ました處へ、あの清しい、流の音を聞きますと、何うしても我慢が出来ません。然いうでない時も、何爲か、川、清水、泉などの繪を見てさへ、飲みたくありません性質ですから、折よく橋の上で水を汲んだ婦人があります。一口無心をする、快く釣瓶を貸して呉れましたのを引かぶつて飲みました。冷さは五臓に浸みて、判然目が覺めたやうになりました、朧氣だつた月も透通つて。

爾時見ますと、今ので大方覆したと見えます。婦人が又汲直さうと、釣瓶を投げましたので、これは餘計な手数を掛けたと思ひました上、一寸見ても然う云ふ事には馴れない人と存じましたから、瀬に引かれてはなりません。汲んで上げませう、と傍へ寄る時、否と見向かれた顔を見ますと
お嬢さんです。

丁ど十年ぶりで逢ましたが、睫毛の濃いのも見忘

れません。一晚も夢に見ない事のない方なんです
から。

最うこんな事を公に申さねばなりません運命にな
りましたから、假令無罪の御裁決を請けましても、
私は再び人に顔は合はせません。
と一度、被告席に目を閑ぢて。

十四

徐ろに語り續けた。

單に見忘れないばかりではありません。佛も十年前に少しも變らず、同一十七に見えたのです。唯髪の形が違ひましたゞけです。最後に見ましたのは、山名へ縁組が、お極りになつて、結納の祝の時、島田に緋手絡を掛けて居たのでした。

私は出入の者の倅でしたが、御贔屓だつたさうで、破格に其席に列したので。禮服もありませんから、木綿布子の筒袖を着て、片隅に小さくなつて畏つて居りました。

上座の挨拶から、席を起ちしなに、令嬢が、私の傍を通つて、座蒲團の外に居たのを見て、
(敷くものですよ、)
と人知れず低聲で叱るやうに言つて、膝の下へ手を入れたんです。私は固くなつて、それなり膝に手を重ねたまゝ座が開けるのを待ちました。

酔よツばらひにからかはれて、令嬢れいちゆうの笑聲わらひこゑを聞く度たびに、私わたくしの其その寂さびしさと言いつてはありませんでした。最もうお納なめ、お納なめ、と言いふ聲こゑの聞きえる時じ分ぶん、漸やう々／＼摺すりぬ抜ぬけたらしい風ふうで、密そつと私わたくしの前まへへ來きて、

（おひと一つ頂いたきませう、お別わかれに、）
と言いつたんです。

何故なぜか、胸むねが一杯ぱいになつて、

（お別わかれなんですか。）

（お嫁よめに行いくんですもの。）

と何氣なにげなしに莞爾にっこりしました。

（お嫁よめに入いらつしやると、最もう、）

と言いつて後あとが出でませんでした。

（名残なしろを惜をしむねえ。）

と横合よこあひから唐突だしぬけに申まをした者ものがあります、瀧山澤夫たきやまさはを

といふ盲目めくらです。

傍聽席ばうぢやうせきは一層耳そうみみを傾かたむけたのであつた。

丁ど私の隣に坐つて居て、初めから、頻に。叱言を言つて居たのです。僕の杯に亀裂は入つて居ないかの、焼物を突出して、君匂を嗅げ事の、何だ、蛤の吸物か、畜生、などゝ人事ながら私はハラ／＼して居たのでした。

盲人に毒突かれて、赫と逆せた處を又、背後に立つて居て、背中を敲いたものがあります。

(感心に色氣がついた。はゝはゝゝ、) と。

これは出入の大工でした。私の父と懇意な。

私は顔から火が出るやうになつて、獻さうとした杯を持った切、固くなつて俯向いたので、

(では、お酌を、)

と美波さんが銚子を取りますと、

(願ひませう。)

と盲人が猪口を突出しました。

向うで呼ぶ人があつて、美波さんは座を立ちまし

た。其の氣勢が、夢枕に立つた神の姿が、遠ざかるやうに思はれました。――其ツ切。此の間の晩まで逢つた事もなく、途中で見懸けた事もあります。又逢ふやうな機會には、私の方で避けるやうに、避けるやうに、として居たんです。何故か、其の人に逢ふ事は、神佛禁斷の掟のやうに思はれましたから。

若しうつかりとでも、顔を合はせますと、非常な事が起りさうに、心に暗示がありましたものを。偶然とは言ひながら、一の橋で逢つたばかりで、恚う言ふことに及んだのです。

其の結納の晩の事は、恚る神聖なる法廷で申上げられる事ではありませんし、又嘸お聞苦しからうと恐入ります。

けれども刑事の方が、お聞取りになつたさうで、美波さんに逢ひましてから、橋の上で少時話をして居た、其は何う言ふ事を饒舌つたか、と御尋ねであ

りまするから、有りのまゝ申すのです。

私わたくしは酔よつて居をりました。

而そして其時そのとき、饒舌しやべりましたのは、唯今たゞいままを申しましたと寸分すんぶん違ちがひません、結納ゆひなひの晩ばんの事ことで。但たゞちよくせつ直接其その人ひとに其時そのときの事ことを話はなすのでありますから、恚いかうでしたねえ、彼あゝでしたねえ、と此この過くわ去こで、（ありましたねえ）を澤山たくさんに言いひました事ことを覺おぼえて居をります。

これは、美波みはさんが、

（何時いつお目めに懸かりました切きりでしたつけ、）
と言いつたのに就ついて。

月つき明ありに、其その人ひとを見みました時ときは、ハツと思おもつて飛と退ひきました。何な故げか、今いま飲のみんだ水みづが毒どくになつて、其そのまゝ一命めいが終をるのはだらうと考かんがへられたものはですから。

「おほ、志し乃のちゃんですか、」

と言いひかけて、其その時とき洋畫家やうくわかは苦笑くせうしつゝ、

夫人ふじんが私わたしの名なを呼よんで、

「お懐なつかしい、」

と言いはれたので、何なにも彼かも忘わすれました。

其その處こで、其そのの（何時いつ逢あつた切きりだつたか、）を聞きかれましたものはですから、結納ゆひなふの晚ばんの事ことを立続たてつゞけに話はなしました。

あの晚ばん（最もうお別わかれですから、）と言いふのを聞ききました時とき、呼い吸きが留とまつたやうになつて、其それまでに年としとゝもに積つもつた一切さいの事ことを皆みな忘わすれて了しまつたんです。不孝ふかうな兒こは、何どうして育そだつたかさへ覺おぼえなくなりなりました。

習つた事も忘れませんでした。ものゝ味も忘れませんでした。それから唯目に見るまゝを繪に描いて、描いたものゝ色が映るだけの事をして生きて居たのです。

實際、夫人に逢ひましても、其の他に些とも何も話す事がなかつたのです。

けれども是だけは、何時か一度美波さんに逢つて話す機会があるだらう、とよもやながら、其だけは信じて居ました。

人は屹と死ぬものに極つて居るのと、同一やうにです。

刑事は何と見ましたか、口を利いたのも大概は、私ばかりで、夫人は多く聞いて居られた方でした。

だが、

（すつかり見違へました、大きくなつでねえ。）
と言ふことを、二度も三度もおつしやつた。

成程、其の筒袖とくらべては、不思議に生意氣に

袴はかまなんぞ穿はいて居ゐたからでせう。丈たけはおなじでありますのに。

其それに好いいい外ぐわいたう套たうがで出きましたね、と障さはつて見みながら、

「お父とうさんのお墓はかま参まゐりはなさいましたか。」

夫人おくさんの言ことばは、大抵たいてい此このくらゐなものでした。

門かど口ぐちまで、釣つる瓶へを提さげて持もつて参まゐつて、最もう其そ處こで別わかれませうと思おもひました時とき、何なに心こころなく、

「これからお臺だい所じころなんでございますか。」

と尋たづねますと、

(否いへ、)

と言いはれた聲こゑが曇くもつて、しばらく途と絶たえて、

「主人あるじが、茶ちやを飲のまうと申まをしますから。」

私わたくしは前ぜん後ごを忘ぼうじ、むら／＼となつて、血ちがくわつと湧わいたんです。何な故げ、と聞きかれましてもお答こたへは出で来きかねます。

「貴あなた女なのお手て傳つたひをしたんです、御ご主人しゅじんのなら厭いやです。と、突いき然なり釣つる瓶へを叩たき着つけて、自じ分ぶんの身か體らだを

振飛ばすやうに駆出してしましました。

私は結納の晩に、別れてから以來と言ふもの、如何なる場合にも、我と言ふものを思出したことはありません。何も彼も忘れたからです。ものゝ味も分らないやうです。暑さも寒さも人ほどには感じなかつたかも知れませんが。それは私の製作しました繪を御覧になると分ります。たとへば、風のまゝ、水のまゝに柳が動くやうに、筆を持った手を動かして、自然が使ふ自分は唯、繪の具のやうなものでした。

ですから、口惜しい事も、腹の立つ事も覚えなかつたのでありますのに、爾時ばかりは、腹が立つた。予は美の神の寵兒である、何等の故に、藤次輩の權助になつたのだらう、と思はず切齒をしたのです。人には屈從に過ぎると言はれますほどに、謙讓の徳だけは誰にも譲らず、自分が使ひます女中さへ呼棄てには出来ないまでに、抑壓された生立ちでありますのに。

それから、學校へも參らないで、温泉に參りまし

たのは、靜に神の禁斷を破つた罪を、身を清めまして、待つて居る覺悟なのであります。

恚やいうに申しますからは、假令法の上の罪はありませんが、私に道徳の上の大罪人です。一旦口外しましたからは、我から世の制裁を受けます決心、些とも隠す事はないのです。

夫人は夫を毒殺なすつたと言ふ嫌疑ださうです。打明けて此の事を申しますのは、其の人の利益であらうと信じて申上げます。眞實の告白は最良の辯護だと存じますから。

私は美波さんは、然やうな罪惡を犯す人でないと信じて居ります。――けれども夫人が、もし實際其の夫を毒殺する意志があつて、私に手を貸せと云ふ相談がありましたとすれば、斷じてそれを肯はなかつたか何うか、斷言は出来ません。

と興津志乃吉は述べたのであつた。

しかし、確に毒殺の共犯者と認めるよしの、検事

の論告があつた後、畫家の辯護士の申請に因つて、
喜兵衛と言ふ老大工が出廷に及んだ。

是は夫人の實家方へ古くから出入の棟梁。此の結
納の夜、爰に被告の志乃吉の背を敲いて、（色氣

が）云々と、擲掄一番した爺である。

渠が證人として呼ばれたのは、志乃吉の、當初か
ら夫人に戀して居たことを、其の時の記憶を陳べし
むる事に因つて、證據立てようとしたわけではない。

志乃吉が工業學校の教授として、東京から當地に着した日、旅店で落着くと其まゝ、父の菩提所へ參詣した。其の足で、昔 馴染の喜兵衛をぢを見舞つたと言ふ。其の日は、歡迎會の直ぐ前の日に當るから、毒殺の事に就いて、夫人と打合はせなどする暇のない證明なので。

喜兵衛は確に證言した。而して此のをぢの口から、山名の家没落の次第を聞いて、志乃吉の餘りの事に歎息をした次第から、お嬢さまは、實家へ歸つてござる、と話した時、もぢ／＼しながら、一度顔が見られようか、と言つて其の年をして赤面した事も、正直な爺は、場所がらも構はず、哄々笑ひながら申立てた。

生憎泊りがけに二三日何處へかござらしけえ、歸らつしやりさへすりや、逢はせるのは譯はねえ。それとも疾く見てえなら、内の孫娘が頂いて來て持つてるだ。知事様や市長様なぞと、一緒に大勢で取ん

なされた何とか會の時の、圓鬚の寫眞があるけえ、
見せませうか、と言へば、考へ込んで、否、其には
及ばないとて、久しぶりだ、ハイ、お持たせの酒一
杯、と引留めたけんど、早々と歸らしつたに違えご
とはねえ。

爾時貰えました二升の酒さ、ちびり／＼未だ酔も
醒めねえ内に、えらい事がはだかつた、と今度は又
目を圓くする。

酒屋を検べると、酒の銘も、升も、値段も、日も、
小賣帳にぴつたり合ふ。

雖然、是だけでは、其の日着いた事の、十分な反
證にならぬ。表向は其日でも、内々何時の間にか土
地へ入込んで、人知れず、夫人と媾曳をしたかも知
れない。疑が猶晴れぬ。

ト最う一條、被告の爲に有益な事實があつた。そ
れは、同日の汽車の中で、縣の代議士、何其に逢つ
たと言ふので、最も志乃吉は其の代議士と、一面識

があつたのではない、だけ、一層事柄が確められよう。

早や、停車場も七つ一八つ、故郷の山の形が可懐しかつたので、自分の坐つた座を立つて、其の山のある方の、隅の硝子窓から覗いて居た。其の二等室は客が込んで、椅子は残らずぎつしり充満。頃刻して志乃吉が舊居た席へ掛けようとすると、先刻から、革靴を下に、白い毛布を手を下げて、居處がなく立つて居た、上下大島揃ひで、白の羽織の紐をぶらりと結んで、鼻の低い、大顔の、眉毛の賤げに太い、目のぎろりとした大漢が、何時の間にか、占領に及んだばかりか、革靴さへ引上げて、志乃吉の分は落してあつた。

熟と顔を見ると、見ない振して、革靴の口を大きく、ぱつくりと開けて、一つかみ書類を引出した中から、一通封を切つた手紙を出して、捻くつて見せた、上包みに達筆で、
縣代議士、何某殿
と一面に記してあつた。

函嶺を越え、恚う云ふ事は有勝である。志乃
吉は、其の紳士が假令代議士でなくても、別に咎め
ようとはしなかつたに。

是見よがしの名は覚えて居た。

辯護士は其の代議士の出廷を望んだ。

代議士は、法廷で、椅子を呉れい、とあつて、肥
 つた膝を、毛だらけな片胡坐。腕を組んで、鼻と目
 と、四ツの穴で、じろ／＼と被告を見て、

「うむ、此奴、知つちよるヨ、」

と肩を聳して言つた。

判事は黙つて頷いた。

却説また、お美波も、公判の時に陳べた事は、或
 點まで志乃吉の言と符節を合はせた。

それからである。

宜誓の上、瞳に一點の曇もない、清しやかな目を
 伏せた。睫毛の露を拾へば、

山名の、主人藤次は、身の成行きを果敢み、且つ
 人に恥ぢて、夫人に情死を計つた。お美波は謹んで
 同意した。此の相談は、前夜花屋の婆が奥の間の隠
 住居に於て、降りしきる雨の中で極つたので。

其の相對死の手段は、慙く成り果てゝも持ち傳へた、茶の湯の器は不足ながら整ふから、今生の思出に、一つの茶碗を夫婦で飲むで、折からの青葉の蔭に緑の泡と消えとしよう。武士の切腹より、われらには却つて本懐と言ふ。

翌晩、即ち一の橋の月の夜、家主の婆さんが用達に出かけた留守、いざ、此の時と、鐵瓶に湯を沸さうとすると、雨なり、さらぬだに水は悪し、井戸は淺し、柄杓にも及ばぬほど、溢れたのは、山吹の影も映るまい、まるで泥水。

是で火を消すも心持が悪かつたので、直ぐに其の釣瓶を提げて、月の橋を渡つた。恰も可、川音の此處が名に立つて、數寄の茶人は故とも汲む。土地の漢詩人などは、東坡が汲み欺いたとか云ふ、中峽と稱へて、水の味を鄰國に誇る處。

けれども、此の水は、其の半ば、門口で志乃吉の爲に棄てられた。

釣瓶の水の、底にのみ残つたのを見るに就けても、
夫人が馴れない水仕の勞を思遣つて、藤次は是に泣
いたのである。

毒は水から入れて、火鉢に掛けた。湯が沸ると、
衣紋を直して、お美波は其處に端坐して、心 靜か
に一手前した。

柄杓を置いて、會釋する時、夫婦齊しく手を支い
て、今生と別離を、目と目で告げたのであつた。

裁判長は恚う云ふ問を起す。

「刑事が入つた時、被告は客の席に居たのではな
いか。」

「はい、後で座を更へましたのでございます。」

「何ういふ時か。」

「私が立てゝ差上げましたのを、主人が二口飲み

まして、此方へ参れ、と申して、自分の居ました處に呼びましてございます。」

「其處で座を更へたのか。」

と言ひかけて打額き、

「茶碗には、被告の飲む分が残つて居たか。」

「半分に些と一

少うなつて居りましたのを、主人が、主人の席へ、ちやんと坐り直りまして、片手膝につきまして、定の處へ据ゑて寄越しましてございます。」

「何故、飲まなかつたか。」

「被告はなぜ、それを約束通り飲まなかつたか。」

「飲まうとした處へ、刑事が行つて、それで機會

を失つたのか。」

「否、然やうではございません。」
と、特に此の聲は愛々しく優しく聞えた。

「それでは飲む隙はあつたのぢや。」

「はい、」

「被告、」

と少しく調子を上げて、

「お前が逡巡するのを見て、主人は何とも言はなかつたか。」

「両手を膝につきましたなり、熟と視めて居りました。」とさしうつむいて答へたのである。

裁判長は吃と見て、

「それから」

「

「其の中に、蒼白かつた主人の顔が紫色になりました。アツと申して倒れました。私は夢中で突伏し
ましてございます。」

「相濟まんと思つてか。」

「何う云ふ考へでございましたか、私は些とも存
じません。」

「夫婦で情死をしようと、主人が申した時、お前
はそれを留めたか、何うか。」

「一人と申すではございません、一緒にと申して
くれましたから、留めは爲ませんでした。」

「快く同意をしたのぢやな。」

「最う家はなくなります、兒もございませず、何
にも便がありませんのに、主人が死ぬ、と申します。」

あとへ残りましても何の効もございませんから。」

「什麼心持がしたか。」

「何時も、恚うしてくれ、とつい手許の用をいひつけられます、其を致します時と、同じ心持でございました。」

「然るにぢや、何故、其の場合に臨んで、其の薄茶が飲めなかつたか、被告、」

と言を更めて、

「篤と前後を辨別へて申せ。自殺は天命を損ふ一種の罪惡ぢや、と心付いたか。」

「否」と、言下に答へたのであつた。

「注意して、間違のないやうに、いつはりを言うてはならん、何故、急に心が變つた。」

「心變りがいたしましたのでございます、少し時が延ばしたかつたのでございます。」

「時間が延したかつたとか。時間とは、」

「誰か門口に来ていらつしやるやうに存じました
ものですから。」

「門口に」

と稍其の威嚴ある顔を傾けつゝ、

「何故、其の事を申して、主人も一緒に留めなかつた。」

「主人は最う其の時は飲みましたあとでございました。それに、今死なうと申します時にたとひ何でございまして、餘處の男の方に、最う一度逢ふまで待つて欲しいとは、申憎うございました。」

「餘處の男とは、それは誰か。」

「答は途絶えて、美波はしばらくしてから、
「ですが是は些とも其の方が御存じの
事ではないのでございます。唯私の心だけ。」

「

「其の方とは
と膠なく疊みかけて問詰める。」

「其の
志乃さんでございます。」

傍聴席は動搖をなした。嘗て此の事件に就いて、
自から共犯者である、美波の密夫である、と自首し
て出て、色情狂の宣告を與へられた、盲人瀧山澤
も、同じく其の席にあつたことを、こゝに注意して
置かねばならぬ。

「被告、」

と呼んで、慎重なる音調もて、
「志乃さんとは、興津志乃吉の事か。」

「は、」

「お前が毒を飲まうとした時、何か、興津が門口
へ来て居たのか。」

「否、其の方とは分りませんが、誰方が門口にい

らつしやるやうな氣のいたしましたのが、其の方が
戻つてお出でなすつたやうに、思はれましたのでご
ざいます。」

「戻つてとは、何處からか。」

「はい、」と美波は聞返した。

「いや、被告は、興津が戻つて來たやうな氣がい
たしたと言ふではないか。」

「それは、あの、何處からとは知りませんが。」

「が、何處からか戻つて來たらう。」

「はい、」

と言つて、美波はおろ／＼して居た。

「それは、何處か、」

「何、何處と申して、」

「既に戻つたらうと想像するには、心當がなくて
はならん。其の心當りを言はなきや不可んのだ。」

あゝ、お掛けなさい。」

と、椅子を許した。ハタと背後へ崩折れると、兩
袖で犇と面を祕した。状を見る、と傍聴席で怒鳴
つたのがある。公衆は瞳を集めて、其の聲する方を
見たが、誰も盲人とは思はなかつた。其の内に醫師
が来て介抱した。

恚て漸くて顔を上げた、美波の色は、うたゝ蒼白
なるものであつた。

十九

「何と、何と申しまして宜うございますか、」

と惱ましげに帯の上を壓へながら、

「唯、あの、釣瓶を打棄つて駆出しておいでなさいましたのが、戻つておいでなすつたやうに思はれましたのでございます。」

「すると何か。何處からか、それは知れんが、興津が引返して来て、家の様子を伺つたんだな。」

「えゝ、」

「藤次を毒殺する様子を。」

「えゝ、」

「確乎と答をなさい。」

と大音にて、

「藤次を毒殺する様子を伺つて居たのか。」

「えゝ、」

「被告、氣を確に持たんと不可ん。興津志乃吉の身の上ぢや。」

夫人は夢が覺めたやうに、判然と其の美しい、漆黒な瞳を睜つた。

「興津は、門口で、藤次が毒を飲む様子を見て居たのぢやな。」

「まあ、」と吃驚した風情で、わな／＼と其の肩が震へて、

「飛んだことを御意遊ばします。志乃さんは、何にも御存じはありません。」

「何故、戸外から内の様子を伺つたか。」

「否、怪我にも、そんなことはありませんです。」

「被告が今申したではないか。外に立つて居るや

うだと

申した筈だ。」

「それは、唯、私ばかり、そんな心持がいたしましたゞけなんでございます。」

「何にも約束をせず、又十年ぶりで其の晩はじめ逢つたものが、引返して来て、門口に立つて居さうな心持は、何うして起つた？ 被告！」
と聲が高かつた。

美波は、はら／＼と落涙して、犇と又胸を壓へて、
「どうぞ、お仕置を遊ばして下さいまし、私が心得違ひでございます。志乃さんは、可、可哀相に、

」

と聲が、うるんで、
「何にも、何にも知つちや居ないのにね。」

裁判長は調子をかへて、もの和かに又尋ねたのである。

「お前が、飲んで、夫とゝもに死なうといふ水を

汲みに出た、橋の上で、興津に逢った時は、どんな、
思がしたか。」

「懐しう存じました。」

「否、其の事ではない。」

と卓子に胸を屈めて、前へ出るやうな姿勢になつ

て、

「死なうとする事に就いてぢや。」

「餘り思ひがけない方に逢ひましたので、つい其
の事は忘れて居ました。」

「多時立話をしたと聞いたが、其の間に、情死の
事については、何事も言はなかつたか。」

「はい、申します處ではございません。まるで其
の事は忘れまして、昔いたした、賑かな、春の歌留
多や双六の事が、目の前に見えまして、負けて惜し
かつたこと、勝つて嬉しかつた事、福笑ひの面形が
可笑かつたり したのでございます。」

「分れるまで、些とも思ひ出さなんだと申すのか。」

「はい、否、志乃さんが、釣瓶を落しました時、ハツと思ひますと、これで死ぬのか、と氣がつきまして、急に心寂しうなりました。」

それから色々なことを考へまして、これは、志乃さんが、私の死ぬのを、止めて下さるのぢやないか、と存じましたり、最う一度あの、立派にお成んなすつた御様子が見たかつたり、急に最う些と活きて居たい、と存じました。ですが、支度は濟みました。主人も飲みました。私もと存じますと、志乃さんが引返して来て、門にお立ちのやうでなりませんから、せめて、一度顔を見て、と立たうかといたしましたけれど、主人が丁と坐つて居ります、其の内
に
と言ひかけて、差俯向いた。

「萬一、それが興津で、其場へ參つて、お前の死を止めたら、何うしたか。」

「否、志乃さんではないのでございます、それは、あの・唯私が然う思ひましたゞけで、あの方は何にも御存じはございません。」

「唯假にぢや、假に然うしたらぢや、
と裁判長は温顔に笑を含んで聞いた。」

「はい、」

と言つて又少時黙つた。傍聴席は寂然となつた。検事は屹と被告を見た。辯護士はじり／＼と膝を向けた。

「思ひ留ります。」

「思ひ留る？」

と聞返して、

「何、思ひ留まるか。」

「留めてくれました其の方に、罪がございませんければ。」

「自殺を留めるに罪はない。が、罪がなければ、思ひ留まるか。」

「はい。」

「被告、お前の夫は傍に死んで居たのぢや、それ
でもか。」

美波の答に、辯護士は茫然とした。検事はすつくと
と起上つた。

法廷は、興津志乃吉に無罪を宣告した。

けれども畫家が、最早工業學校繪畫部の教頭でないことは云ふまでもない。其の影を隠したのを、尚
追跡して、土地の、正義團、矯風會などの壯士が、
社會の制裁を加ふると稱して、東京までも奔走した
が、遂に形影を捉へ得なかつたのである。

山名夫人美波子の罪状は、讀者の想像に任せよう。
お美波は公判廷に於ける最後の一言で、然らぬだに
纔に黒髪わすかの末くるかみに一縷すゑつながつたばかりの同情の磐石
は、奈落ならくの底そこに切斷せつだんされて、新聞紙しんぶんは二十世紀にじふせいの刑
法はふに十字架はりつけのないのを惜み、且つ検事は控訴する
(由)と記して、一般の喝采かつさいを得たけれども、し
かし此この(由)は、唯讀んで字の如しであつた。

刑の名は確か然うではなかつたが、公衆は夫人を夫殺しと號した。雨も風もない年も、痛罵怒號は轟々と、白日に且つ暴れに暴れて、土砂を捲き、樹を揺つて居たのである。

時維れ

午前七時、刑期満ちて獄を出さ

れようとする時刻些と前に、犇々と詰懸けた公衆の中を通つて、緋の法衣に紫の輪袈裟掛けたる、本願寺派の僧侶を眞中に、前後に連つて、同勢三十名ばかりの一行が靜々と練つて來て、女囚が其處から放たれる、監獄の裏門の高き土堀に添うて留まつた。

是は、報恩奉佛と、頭へ韻を踏んだ割書で、大きく佛教團と書く、團體から流出された、お美波を迎ひの行列であつた。此の團體には縣の貴婦人の連名が多いのだけれども、さすがに白襟も三枚襲も此の同勢の中には見えずに、一人白髪の切髪で、づんぐり肥つた婆の、鼠の紬の被布に黒のカシミヤの袴を、すそなが裙長に穿いたのが、緋の法衣と、もに異彩を放つ。此婆さんは、特志で監獄へ入つて罪人を教化などする薩摩辯の達者もので、一 某 男爵とかの後室

で、渾名を勳章、婆々と稱へる、

「今其被布の上に胸にざげた二つのキラ／＼するのが其れで」佛教團の幹事である。あとは屈竟の壯士輩。いづれも矯風會、正義團の歴々方で、詮ずるに三派合同の一行が入交つて此處に押寄せた次第である。

是より先、苦役中に花もしほまず、美波が舊の姿で世に出ると云ふ事になると、式の如き毒婦の形骸は焼いて粉にしても空気を汚すと、昔佛蘭西に起つた、フウドル、ド、サクセツシヨンの其よりも忌はしがつて、正義團の人々などは、假令法律は淫婦を死刑に處さなくつても、社會の制裁は生けて置かぬ、と喚いたのであつた。罪人でも人を殺せば、自分も死ななければならぬ事は明であるが、正義の二字に對して死をだも顧みぬに不思議はなからう。

此の勢に恐をなして、お美波の實家も娘を引取るに躊躇した。否、社會の制裁の下に餘儀なくされたのである。

時に佛敎團の貴婦人が計らひで、正義矯風の二派の前に、其の生命ごひを種々交渉の末、お美波を監獄の門に迎へて、立處に其の黒髪を斷つて、其場から然るべき監督の下に、一生尼寺に推籠めようといふことに妥協されたのであつた。新聞紙は貴婦人がたの博愛を、口を極めて讚歎した。恚う云ふことは、人に頼まれてするわけではない、其處で、博愛になる。誰も頼まないことをする、其處で、慈善ともいふのであらう、けれども沙汰の限りである。電車の焼打などゝ一般に。

盲人、
「最う名告つても可からう」
瀧山澤夫
が控込んだ、
荒物屋の店から、
丁ど其の正面に見え
る。
爰にあらゆる群集を數珠繋ぎにして、
一處へ線
を纏めて犇と蓋したやうな灰色の門は、
透間なくひ
たノノと鐵の釘隠を鏝うて、
天地は長に幽冥の戸を
開かず、
明暗兩ながら内部は神秘であるかの如くで
ある。

洵や、
監獄の裏門は、
舊藩の牢の表門を、
其まゝ
裏木戸に使つたので、
雨の夜には、
異類異形なる惡
鬼の髣髴として露るゝ、
色々の形に土の裂けた一帯
の土塀は、
冬木立の梢の如き參差とした忍返し
の釘を貫き揃へて、
空を飛ぶ鴉の胸も刺し通すべく
左右に連り、
一方は野原を控へ、
一方は次第高に坂にかゝ
つて、
塹壕を抱いて敵つて居る。
濠の水は流れずに、
異臭を放つ塀の前の深溝には、
今も兎もすれば鬼火
が燃える。

此處を通らねば行けないから、
彼處に曇天の如く

空に横はる坂の上の、やがて公園にしようといふ設
計のある高原を稱して、賽の河原と呼んだ。坂の下
口から濠へ廻る土堀の角は、鬼の腕が出て掴むとい
つて、心弱いものは、今時分も一人では通らぬ。

されば此の群集ながら、處から寂寥して静まり
返つて居る。或は毒婦の姿を見てから、怒號の絶叫
を發するため、音聲の有るが丈を、蓄積して居た
かも分らぬ。

雨がぼつりと來た。

彈丸が落ちたやうに、處々、ぶす／＼と小さな砂
煙の輪が飛んだ。坂へ懸けて、一幅の黄色な砂が空
ざまに吹いて通る。

日は監獄の釘隠を、怪しげに照らして居た。

雨がぱら／＼と斜に。

風が颯と馳せた。

途端にピーと、何處のか汽笛が唐突に空天に鳴り出した時であつた。是に度膽を抜かれた群集は、二度吃驚して電かと思つた。斜にキラリと裂けたのは鐵のごとき横手なる潛門で、蒼き凄冷な光の、人目を射て閃いたのは、裏に籠つた秘密の風の、世の空氣に激觸した現象であらう。

唯見ると、巖の壁の如く、咄嗟に密閉された板戸の前に、夫人の姿は朦朧として描かれた。――月の世界は麗人を投げ落した。幽幻の扉は、屋氣樓中の佳人を吐出したのである。

「出たぜ、」
と旅商人が飛上つた。

「ど、どれ、どれ、」
と其の肩に掴つて、ぬつくと立上つた盲人の足は、早や店前一杯の人の動搖む中に、高帽子とゝもにふら／＼と幽靈の如くふらついた。

「どんな風で、ど、どんな風で、」
と其の肩にぬつぺりとした顔を重ねて、耳に口を
差付けてしがみつくとやうにする、呼吸の臭さに、旅
商人はぶる／＼と顔を掉つた。

「些と遠い。あゝ、向うむきになつて、了つた。」

夫人の姿は細りして、氷の如き門の扉に其の前髪
をひたとつけた。黒髪の透間から雪なす色の漏れた
のは、面を蔽うた掌に隠し餘つた片頬である。

末廣がりの扇の紙の、要をさして纏まる如く、一
同のは足は盲人まじりに、ぞろ／＼と門をさして寄合
うた。

眞先に出たのは太い杖で、續いて踏出したのは袴
穿いた皺びた脚で、直ぐに見えたのは勳章で、切髪
の尖が、犬の尾のやうに揺いで出る。

勳章婆々は、大溝に渡した缺け／＼た石の橋を渡
りかけて、其處だけ暗い、押入のやうな門の屋根の

中へ、及び腰に前へ屈みながら、太い杖をづつと伸ばして、顔を隠したお美波の背中へ、其のさきを達かせた。

是で引出さうとするのである。此の大慈悲の救主がないと、地獄の口は、再び其の美しい罪人を銜へ込みさうに見えたから。

緋ひの法衣ころもは迷惑めいわくさうに其その背後うしろに控ひかへた。矯風正けうふうせい
義ぎの人々ひと々は、續つづいて一列いちれつに垣かきを造つくる。

「これ、これ、」

と、ものを云いふ勳章くんしやう婆々ば々の頬ほの肉にくは、だぶ／＼と黄色きいろに揺ゆれて、

「これ、この杖つゑに縊すがらつしやい。難有ありがたい事ことにの、
佛教團ぶつけうだんで、お前まへを救すくうて遣やるのぢや。貴たふとい方かたたちが、
如來にょらいのお手てでお助たすけなさるゝのぢや、これ、縊すがらつ
しやい。」

と喪章もしやうの切きれが、燈明とうみやうの灯影ほかげに揺ゆらるゝ状さまに、震ふるへ
て居ゐた、今いまも同おなじい、細こまかい雨あま摺がすりの紫紺しこんのお召縮緬めしちりめんの、
見みるから棺ひつぎの中なかから引ひきだ出だされたやうに、影かげの薄うすい羽は
織りの上うへから、

「これ、此方向こちらむかつしやい、聞きこえんか。」

と觸さはれば縋もつれさうな細腰ほそこしをぐい／＼と突つくと、是これ
が膚身はだみに應こたへたか、肩かたが落おちて、ハツと其その杖つゑの尖さき
を拂はらふやうに手てに取とつて、振向ふりむいた。色いろは抜ぬけるほ
ど白しろくなつて、いくらか少すくなくなつたらうと思おもはるゝ

黒髪が、薄くなつたゞけ、束ね髪の商品が好く、眉が一際濃くなつて、顰たさは一層倍した。二かは目に立つほど體に面瘦せしたが、紅をさしたやうな唇あたり、淡く憂の影がかゝつて、淺黄の襟の若々と、近優する俤に、群集はハツと美に打たれて、火事場に月を仰ぐ思である。

毒婦と呼び、淫婦と叫び、殺せ、殺せと喚くのが、遠く隔つた方から聞えて、哄と騒ぎの烈しくなつたは、一つは雨の、やゝ亂れ落つる所爲であらう。

縋れ、と婆々が突出した其の杖にかけた手を、拂ひもせず、鬢を肩にあて、顚を衣紋につけて、打傾いて俯向きながら、襟のかゝつた絲織の袷に、白の勝つた茶博多の帶胸高く、翁格子の前垂の藤色の裏ばかり、足の運びにひら／＼と捌いて、靜々と橋を渡る。

お美波は心に、自分のやうな罪人は、恚うした杖に導かれるのが、世の掟ぞと思つたので。

待構へた緋の法衣が、手首に數珠をかけた手で、
少し引立てるやうにして、空ざまに夫人の手を握つ
た。

壯士は前後を取巻いた。風が颯と
揉立

てられた美波の姿は、藻屑の中から枝珊瑚珠、
に揺らるゝ状して、ニと砂煙立つ折こそあれ。

群集ばら／＼と左右に散つて、瞳を放てば坂かけ
て、賽河原を空に見るまで、灰色に赤味のさした、
大幅の道一條、廣々と開けた、たゞ中、雪を積んで
重ねた上に、護謨を塗つて築けるごとき、山に似
たる大肉團。

之は、そも何等のものぞ。

鼻を以て堤防を繞らし、耳を以て旗となし、頭を
以て櫓となし、六尺二又の戟を植ゑたる。唯見る
城の如き大白象。高く土堀に聳えた背に、茶の外套
の襟を立てゝ、おなじ色の帽を目深に、爪尖鎌の刃
の如き鋭なるなめし皮の長靴を穿いて、横さまに腰

かけたる一員の將軍を安置して、坂の上から唯、霰雲の徐々として空に漲る状に、次第に此處に來たのである。僅に其の前脚をづばと上ぐるさへ、――此の記事を記した。――その枚の――輪廓を越すばかり。

やあ／＼、坂の上の見世物だ、口上いひが乗つて來た、と雪類を打つて口々に絶叫する、見物の中を、象の横合から衝と出て、颯と駆抜けた魔物がある。

褐色の布をくる／＼と頭に巻いて、喧嘩かぶりの如くにした、膝までの蒼い洋袴で、露出の脛は牛の如く、雨に露に塵埃に汚れには汚れたが、緋羅紗の外套、暖簾のやうに翻して、腰に銀色の燦爛たる長剣を横へた、眼の色金色にして髭赤く、鼻は狐の如く高く尖つて、顔の黒さ煤に擬ひ、身の丈六尺に垂たる奇怪なる外來の客。

亞刺比亞人よ、印度人だ、ソレ黒奴が、といふ内に、通魔の閃いて過ぎたと見ると、夫人を引立てた緋の法衣の僧正の、背へ乗越すやうに上から覗いて、

だ。
天窓あたまから鬼おに一口ひとくち、
豹へうの唸うなるが如ごとき聲こゑして、
喝かつと叫さけん

ワツと言つて僧正は、頭を壓へて眞俯向けになる。
 婆々は尻餅を搗いた。

夫人の身は倒れぬ前に、横さまに緋羅紗をかけて
 抱かれた時、象の脚は圓を描いて其處で止まつた。

爾時軽々と、腰をさげられた夫人の肩へ、上か
 ら徐ら手が懸ると、象の背へ搔乗せた。裳が向うへ
 すらりと靡いて、姿はしなやかに仰向けになつたが、
 腰のあたりで背筋が抜れて、半ば起上らうとした、
 顔は、片膝を胡坐した男の膝に突伏した。其の黒髪
 と、焦茶の筒袴との間に、五指の白きが戦くのであ
 る。

亞刺比亞の象つかひは、立直つて手綱を控へた。
 白象の鼻は、龍の昇るが如く、折から次第に雲かさ
 なる仄暗き空さまに、蜿蜒として監獄の門を擢いて、
 次回興行の開かるべき前途の山を指すのであつた。

譬へば洋海の荒浪を乗切り通る、白き色の艦の如く、市民が怒號のあれ荒ぶ、あらしの中を悠々として、のつしと過るを、怒髮冠を衝く壯士輩も、一指を加ふることを得なんだ。悪く礫でも打つて見る、四五十人は立處に踏殺されよう。

二の橋を一杯に、渡果てると、俯向けの帽子を少しずらして、象の背なる丈夫は、夫人を片手に抱いたまゝ、手巾で其の額を拭つた。群集は散つた。雨が烈しく降出したので、夫人の上へも男の肩へも、護謨引の黒い布の雨具がかゝる。

準備は此のくらゐの事ではない。象に振分けにした大貨物の中には、鍋釜はじめ、皿小鉢、米、鹽、罐詰の飲食物、寢道具はいふに及ばず、長棹からんで、大旗の如く捲き込んで、騎の腹に着けたのは、見世物小屋にも住家にもなる天幕であつた。

男兒三年間獻身的の經營に、此のくらゐなことは怪むに足りまい。夫人が同じ年苦役の間に、海外で獲得して齎し歸つた興津志乃吉の土産である。

晩景、町端で雨が上つて、地平線上に一顆夕日の
紅玉落ち、濕ひたる雲の桃色美しき並木の中、青田
の末に海を劃つて、東海道の空に入る、浪なす一帯
の山脈に、白象は其の白き滑かなる背を竝べて、松
と松との奥深く、一團の霞となり行くほどに、

何處もかはらぬ戀路のならひ、

雨が降らうが日が暮りよが。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

ホン二一寸さきや暗夜の世だけれど、

思や人目のないが増。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

たとひ人目があらうとまゝよ、

二人顔さへ見ればよい。

脚が四つと誹らば誹れ、

姿二つに氣はひとつ。

何とそんなもんぢやないかないか象よ。

死んで蓮の花借るよりも、

象の背中の四疊半。

友よ安かれ、家主は俺だ。

たとひ形は鬼でも魔でも、

おなじ思ひのわしぢやもの。

何とそんなもんどやないか象よ。

寢籠揺ぶる子守唄やめば、

寢物語がしたくなる。

よしや他人の睦言なりと、

木の根枕に聞いて寝よう。

何とそんなもんどやないか象よ。

こゝは日本といふ處、

鞭をば高らかに上げつゝ唄ふ、亞刺比亞人の蠻歌
は、奇鳥の聲の幽林を鳴らすが如く、笏を返して響
き渡つた。

四五町後から結束した八九人、屈竟な壯士は、淫
婦姦夫を唯置くまじき、正義團の有志である。

一人おくれて、黄昏をとぼ／＼と、影の如く通る
もの、知る是れ、盲人瀧山澤夫。

村端れの茶店を離れた、唯ある鎮守の森の彼方に、
清き細流の音がして、雨上りの月光に、白銀の如き

水の色の前に横はつた處で、一聲高く口笛を鳴らすと、象は八々と止まつた。

鞭が光ると、靜に前足を折つて、夕月は一隈消残つた雪を照らした。

志乃吉は、夫人を助けて、ともに下りた。

天幕が張られ、調度が運ばれ、焚火が出来るまで、亞刺比亞人の働きは迅速に且つ活発に、馴れたもので。役目が濟むと、二人を離れて、象の腹に背を凭せて、よりかゝり、兩足を小兒のやうに投出して、仰向けに月を仰いだ髭の中へ、衣兜から壺を出して、薰高き酒を注いだ。

其の焚火に映つた、夫人の顔は、はじめて目のふちに紅が見えた。バケツを提げて、のそ／＼と流へ出かけて、志乃吉が一杯提げて立直つた處へ、拔帯を解いて肩にかけて、お美波は腕白く乳のわきに結びながら、急足に追付いて、ト顔を見合せると、前後十幾年の間に、はじめて相逢つて泣いた。

亞刺比亞人は、ごろりと仰向けに寝轉んだが、森
の中から種々な頭が出て此方を伺ふと、むく／＼と
起直つた。

ざわ／＼と音がして、壯士の且つ進み且つ退く氣
勢がするのを、苦笑ひして唯其の黄なる星の如き一
雙の眼を光らすのみであつた。が、盲人の顔が、ぬ
つと出た時、襲はれたやうにすつくと起きて、屹と
突立つたと思ふと、腰なる白銀の鞘をするりと拂つ
て、氣を附け！ にキラリと取つた。

二人は靜に晩飯の支度。

「えゝ、魂消た、これ驚かしちや不可ねえだよ、いくらハイこんな、片田舎の山國だつて、大日本だあ、象が出て堪るもんか、馬鹿にするもんでねえ。」

と年嵩の一人の獵師は、手にした鐵砲の臺尻を捻くりながら、口叱言のやうに言つた。一叢茂つた樹立の中から、目の下に、谷を貫いて麓に通ずる、海道筋でも、繪にも物語にも山の中に隠れた、一町の故道を前に、白壁の土藏のついた、可なり大きい一軒家が、盆の上に乗つたやうに、四邊を森に圍まれつゝ瞰下さるゝ、恰も狭間の山の上で。

「それでは、何を見ようと思つて、大勢こんな處に集つて居なさるんだ。」

と嘖びた聲して聞いたのは、見紛ふ方なき瀧山澤夫で、體裁恰好は、故郷を出た時、其のまゝであるが、彼是五十里餘も離れた處で、日數も大分かつたから、髭が伸び、目が窪んで、繕はぬ白襟のはだかつた下に、蒼黒い胸が、ものをいふ度に動悸が打つて、肋骨に響くのである。

獵師の爺は、其の容子をじろ／＼と視めながら、
「何をツて、怪物よ。」

と言つて、異な顔をして夥伴同士面を見合ふ。夥伴はともに五人居た。くす／＼と土を嗅ぎ、ごそ／＼と樹の根を穿つて、時々ぶる／＼と胴震ひをするのは獵犬で、屈強な地犬に、洋種も交つて、これも五疋。手に手に五條の綱を控へて、五人の獵師は、くるりと盲人を輪取つて居る。

盲人は鼻の頭に、例のせゝら笑ひをして、

「象は居まいもんでもない、獸類ぢやからな。何處に怪物が居るものか。」

「然う言ふがね、然うおつしやるがね、」

と獵人の一人は、癩に障つたらしく突懸るやうに、
「それが居るから怪物だア、正體が知れねえだ。

體が知れねえから、恚うやつて眼張つとるだ。」

「どんな事をする怪物だな、は／＼は／＼、」

と冷笑ふ。と忌々しさうに、又一人、

「どんなツて、そんなこツちやねえ、なあ、爺

さま
様。
「

「む、己も此の年紀になるが聞いた事はねえ。
希代な譯よ、お前様には見えめえが、此の眞下に一
軒昔の庄屋様の家があるだ。」

「むう、むう、庄屋の一軒家が、
と目に見えるやうに打領く。」

「其處の息子どんが、此の間嫁を娶らしたわ。
何が、評判の別嬪よ。若いものさ、皆指を銜へだて
ね、まあ、そんな事は何うでも可え。」

親類廻りをさつせえて、つい此の間の事よ。嫁婿
がハイ内へ歸つて、先づ其所行を脱いでよ、爐
ばたに茶一つ飲む間さなえ、小便から出た嫁殿が、
其の他所行さ疊まうとすると、敷居一つ其方へ脱い
だのが、丸帯から、級帯から、裾模様の京染の小袖
ぐるみ。婿殿は袴だけ脱いだつけな、其の袴と一緒
に、綺麗に掃いたやうにお前様、影も形もねえだ。

家内中總立ちになつて騒いだつけ。もの何んと、納屋の隅ツ子の大きな糠味噌桶の中へ、一纏めにして突込んであつけえ、可恐しい。其の納屋の屋根さ、ちいら／＼風に舞つてるのは、嫁御の紅い禪だあ。

それからよ、夜さり寝てござると、二人の上へ屏風が突轉ぶ、枕がひよいと飛ぶ、行燈が駆出す。石臼が地踏鞴むだ。親仁様は寝たなりで、どつこいしよ、と土間の藁の上へ持つて行かれる。婆様は目が醒めると、圍爐裏の中に坐つてござる。火がないから可いやうなもの、生命がけの怪物だあえ。

先祖代々一向宗で、二十八日には精進を缺かさねえ、神佛の崇うける筈ウねえだ。

畜生めが、狐狸の業だつぺえと、戦争に行つて來さしつた新屋の一等卒どの、それは豪え、鐵砲痕二つある村一番の兄アだ。

鬼門の隅にしつかり構へて、藪の方へ鐵砲さ向け、さア來いと構へたと思はつせえ。眠るでもね

えにお前様、其の鐵砲他愛がねえ。手の上^{うへ}にありや
あるが、紙^{かみ}を乗^のツけたほどにも感じ^{かん}ねえで、煙^{けむり}を持^も
つてるやうだツけの、おや、と思^{おも}ふと、最^もうずる/
と障子^{しやうじ}の穴^{あな}から抜^ぬけだいて、背^せ戸^とさ、ひとり^ありで歩^あ行^る
いて行くだ。」

と目^めの見^みえぬものにも丁^{てい}寧^{ねい}に、己^{おの}が鐵^{てつ}砲^{ぽう}を山^{やま}に這^は
はせた。

「餘りの事に、村中ひっそりして、咳するばかりになつたが、庄家様が、がたぴしは鎮まらねえ。段々に酷くなつて、どさり／＼屋根さ打抜くやうな大石が打つかる。梁から鋸屑が落ちるな、みし／＼家鳴震動だ。

氣イ着けるものがあつて、郡の方に、稻荷さげする婆さまがあるもんだで、頼んで来て佛間へ据ゑたが、私等も見に行つた。ハア争はねえもんだ。合掌した數珠の輪が、桶箆が刎ねたやうに額の上へおつた押立つたツけえ。ぶる／＼と震へると、石のやうに固つた。女の糸の平内様だね。

はい、伺ひます、と問ふ方ぢや恐る／＼低い聲で、手をついて言ふのぢやが、こゝが乗移つた證據にや、右の婆さま名代の鬘だがね、其の時ばかりは鼻息も聞きつけるだ。

伺ふとか。ハイ。貴様は何者ぢや。當家亭主にご

ざります。亭主か。何歳ぢや、といくつを何歳ぢや
ツて豪え事知つとるだ。だけんども、何も分らねえ。
怪物の正體は分らん、き様たち心の迷ひぢや、と言
はつしやるばツかりだよ。

心の迷ひに、鍋釜の踊る法はねえね。

是सानんねえと、今度は神主様呼んで来たが、御
幣が御酒徳利の中で踊り踊つたで。やあ、こりや、
夥伴だつпейし、鍋釜さ踊るのとお友達ぢやで、様
子が知れべい、と思ふと矢張り分らねえ。

別に崇はない。御祈禱はして置いた、六根清淨と
申す、六根を清淨にいたせ、とあつて、何うしてこ
れ五臟六腑が洗へるもんだよ。

三度目に来たのは、豪え易者さ。諸國修行さつし
やる行者で、何でもクン／＼と嗅いで當さつしやる。
薄痘痕のある四十恰好の、書生帯締めた、先生だつ
け。

お供ともについたのがたのもしかつたよ。五十ごじふあまりの大坊主おほぼうずだツけ。手てツ首くびまで倶利伽羅紋くりからもんく々のほりものだね、いらたか數珠じゆずさ首くびから胴どうへ輪わがけにして、脊せいの高たかさ尺しやくもあツつらう。

格幅かつぶくだけでも怪物ばけものは退散たいさんしさうだツけがね。

先生せんせいさ、天井てんじやうの隅すみから、釜前かまゝへ、縁側えんがはなど、懐手ふところで、クスノくと嗅かいで廻まはらしつけえ。

別條べつてうはねえの。

御意ごいで、と供ともの大坊主おほぼうずが言いふだね。

アバタとテキが大分だいぶんに居をるが、と又またクンと嗅かいで、こいらは、しかし業わざをする譯わけはねえ。いや、何なんにも祟たたりではないやうだ、と又また言いはつしやつた。

アバタが蛇へびで、テキは鼬いたちだとの。えてものゝ渾名あだなまで御存ごぞんじの先生せんせいにも分わからずじまひで、騒動さうどうは未いまだに納なまらねえだよ。

氣味イ悪くツて家にや居られねえで、庄屋殿ぢや、昨夜から、外へ出て遠くから屋の棟を眺めて居るだね。

其處でハイ、私等獵夫夥伴が頼まれて、恚うやつて高い路から森を透かいて狙つてるだ。影でも見えたら、遁がしツこねえ、と思ふだに、風もなくツて、ハア樹の葉も落ちねえ。

形のねえものだつペしが、怪物にや相違あんめえ。お前様、現に恚うやつて、獵夫夥伴の一粒選が、手手に自慢の犬を引張つて、集つてるのが證據でねえかね。」

「聞いた話でねえ、見た事だア。」と、少いの
が言ひ足して意氣込んだ。

言葉の切れるを待つたやうに、ニヤリと尻についで頭を擡げて、

「それだから、象を待つて居るかと聞いたのぢや。」

と指を折るやうにして、打傾いて、

「彼是晩方だな。」

「山は蔭つたよ。」と云つて、其の容子を訝つた。中には擔いだ鐵砲とゝもに、首を傾げて居るのがある。

盲人は獨り打頷いて、

「最う、そろ／＼来る、」と呟いた。顔の色は、其の相好とゝもに、極めて險惡なものであつた。

「えゝ、何が来るだ。」と不氣味さうな聲を出したもののさへある。

「否、そろ／＼見える時分だ。逢魔が時ぢやわ。」と杖を握つて、ぬつと立つて、麓の道を考へながら、

「怪物ではないと言ふのぢや。これ、其の業は魔が爲す事ぢや。」

これ、お前たちは知らんのか、其の魔物と云ふの

は、眞白な象ぢや。」

「象、」
と顔を見合はせる。

「其の象の背に、綺麗な、お姫様のやうな婦女と、三十恰好の男が、抱合つて、影のやうに乗つて居る。」

一同これに煉氣とする。息の氣勢を聞澄まして、「まだある。緋色の風呂敷やうのものを被つたものが、象の前に立つて居るわ。見えぬか、むう、お前たちには見えまい。私には見える。これ盲目には見えるぞ。不義、非道な悪魔ぢや、世を亂す鬼神ぢや、人道の敵ぢや、憎い奴等ぢや、不、不埒な畜生、」
とコトノと杖で大地いを敲いて、躍り上つて、白眼で黒息を吐いた。

頭を揃へて、犬が一齊に森を衝いて、背を立て、
びやう／＼と吠えると同時に、
今や暮れ

る、四邊は颯と黄色になつた。

「やあ、象が、」と獵夫の一人は絶叫した。

「見えたか。打て、打て！」と杖を揮つて、盲人は二三尺宙に飛んだ。五人一度に折敷いた。

淫婦姦夫は其處が最後の場であつたと聞く。

記者は人道のために、其の事實なるを信ぜむと欲す。否正に然あるべきなりと、土地の新聞紙は報道した。が、五名の獵師が過失で人を殺傷した風説は、諸國に聞いて露ほどもなかつた。殊に一頭の巨象と、一人の外國人が附随して居るのに。

但盲人の、其の日故郷を出た切、未だ歸らぬのは實である。恐らく長に續くべき奇怪なる新婚旅行のあとを追つて、睦言を聞いて憤死するまで、今もとぼ／＼と歩行いて居よう。

【完】